



12 佐布里池 (そうりいけ)

— 水辺 —



1 調査地について

調査地「佐布里池」は、知多市東部丘陵地に名古屋南部臨海工業地帯に工業用水を供給するために建設された調整池である。池の周囲、約 180ha が佐布里鳥獣保護区として指定されている。

調査は 1974 年から実施され、当初の北部の七曲池出発から、北部周辺の環境悪化により、池南部を回るコースへと変更した。調査者は現在 4 人目が継続担当している。

池の周囲の植生は、建設当初頃のマツ類が枯死し、シイ類、カクレミノ、ヒサカキ、ヤブツバキ等の常緑広葉樹、コナラ、アベマキ、ヤシャブシ等からなる人

工林、二次林である。なお、佐布里梅として 5,100 本が植栽されている。池の植生は、池の性格上、水生植物は全くない。池の完成後、植生等が一変した周辺は、約 50 年を経過し、樹木は生長して材積も増加し、大径木になり、シイ類、クスノキ等の樹冠が鬱閉してきた。そのため林内照度が低下し、林相も単純化、下層植生も貧弱である。さらにモウソウチク等の竹類の侵入拡大が著しく、伐採も行われている。そんな状況で、余り多くの鳥類の繁殖は見られないが、最近では竹木混合林や暗い森林に適応したキビタキの幼鳥やサンコウチョウが繁殖期に見ら

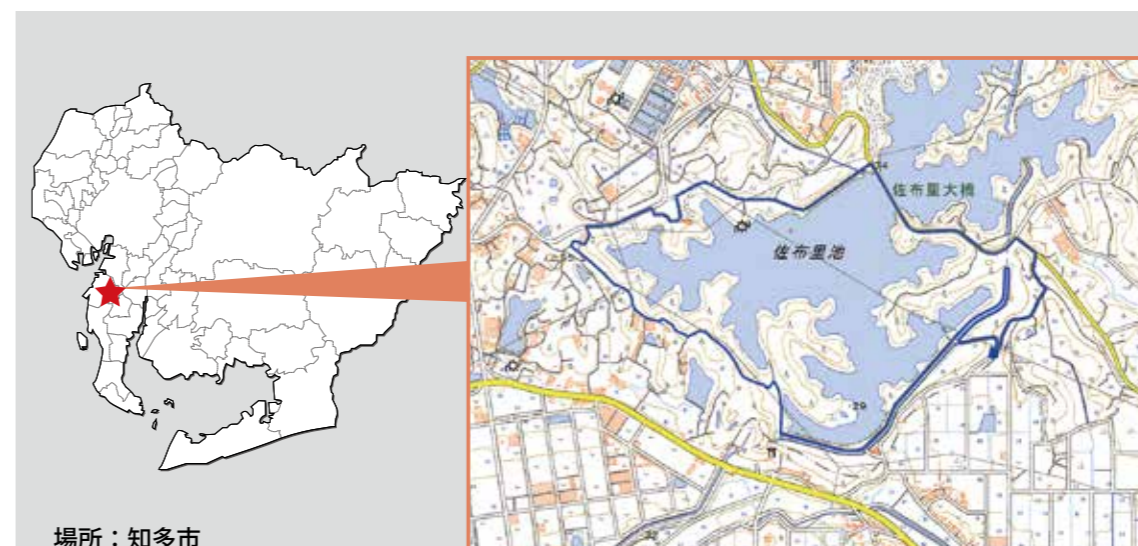
れるようになった。散策路が全線開通し、佐布里大橋から樹林帯、用水路を通り抜け、南部の方へ一周出来る。また、調査コースの隣地に太陽光設備開発等が行われ、南部も次第に環境が変化しつつある。最近では、カシノナガキクイムシによるナラ枯れが侵入し、コナラなどのナラ類の枯損木拡大が心配される。2018 年度からの高圧電線鉄塔建て替え工事等の影響で環境悪化も懸念される。

佐布里池の代表的な水鳥は、秋冬のカモ類である。しかし、最近のカモは水面採餌型のマガモ、カルガモが目立つ程度で、カルガモは百羽以下で最盛期の数千羽から激減している。マガモは数百羽で千羽に及ばない。

他の水鳥は、カンムリカイツブリの個体数や確認の頻度は増加傾向にあり、2015 年 3 月に 14 羽をカウントし、2015 年の夏には越夏した。オオバンも少数が見られるようになった。

秋冬には、カモ類、小鳥類、魚を狙い猛禽類が飛来する。ハイタカ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、ミサゴ等である。2010 年と 2013 年にはクマタカの幼鳥が観察された。オオタカは 1997 年前後から少数だが頻度も多く見られ、その後、継続的に繁殖している。

佐布里池付近には、名古屋南部、衣浦臨海工業地帯に供給する高圧電線鉄塔群がある。鉄塔の穴、隙間を利用してムクドリやスズメが営巣している。池や用水の橋桁にはツバメが営巣し、愛知用水により溜池に頼らず圃場整備が進み、稲作、果樹栽培等が可能になり、「食、住」や隠れ場等、身の安全を守る森が身近にあり、野鳥にとって好適な環境が広がった背景もある。元々、広い農地に依存して生活している種類は、今後、この様に郊外への人工建造物での繁殖傾向は拡大していくと思われる。



場所：知多市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

マガモ、カルガモ、コガモ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、ミサゴ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、モズ、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ムクドリ、キビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ



2 佐布里池における特徴的な変化

オオタカの県内の繁殖記録は、1975年に猿投山麓であり、主生息地は山間部、高い標高の奥山で観察は少なかった。知多半島地域では1967年～1979年頃に秋の渡りが少数見られたのに過ぎなかった。オオタカは、標高100m以下の丘陵地、50m前後の知多市周辺の市町で見られるようになり、1991年頃から当地でも、主に秋季少数が見られるようになった。近隣の常滑市や東浦町で営巣地が確認された1997年前後から観察が多くなり、繁殖期も見られた。営巣木が確認された2005年以降は少数ながら、年間を通して観察された。

以後、オオタカは、継続的に繁殖している。以前は池から少し離れた東部や神社付近に営巣が見られたが、次第に池の方へ移動した。移動後も、繁殖期前後の高圧鉄塔の線下伐採、不用意な保全や整備等は、繁殖中止や営巣木移動の負荷を与えた。遊歩道等の近い巣ほど雛の落下、巣立ち後の事故が起きた。2010年は繁殖が見られなくなった。2011年からは同一営巣木を使用しているが、営巣木が遊歩道ルートになったために、今後の繁殖への影響が懸念される。

佐布里池の主管理は浄水場であるが、水路等は水資源機構等、鉄塔等の維持管理は電力事業会社と各部所が担当し、市や委託管理等、多岐にわたる。作業も下刈、竹木の伐採等が、年間通して施工されている。そこで、事業の情報を受け、協議、調整をしているが、オオタカ等の繁殖期は長く、なかなか難しい。非繁殖期の9月から12月中旬までの作業完了が安全であるが、時期や営巣木との距離、伐採面積等営巣環境の改変に、特に留意が必要

である。生息に下刈や除伐は有利に働く場合があるが種類により一様ではない。今まで以上に、各事業者と緊密に連携していく必要がある。

現在でも万全でない上に、種の保存法に基づく国内希少野生動物種からの解除は森林乱開発防止、里山保全のシンボルのオオタカには大きなダメージを受け、他の種類も言うまでもなく、鳥類生息の環境保全を守れないおそれが出てくる。里山生態系の上位の象徴種としての価値は、今後も変わらない。人工巣等、別の対策が必要になってくる。

カワウの繁殖地は、美浜町の「鶺鴒の山」であり、国の天然記念物として有名であるが、知多市日長には1948年まで繁殖地があり、「鶺鴒の山」以上の一大コロニーであったと言われている。佐布里池から南西約3kmの場所である。

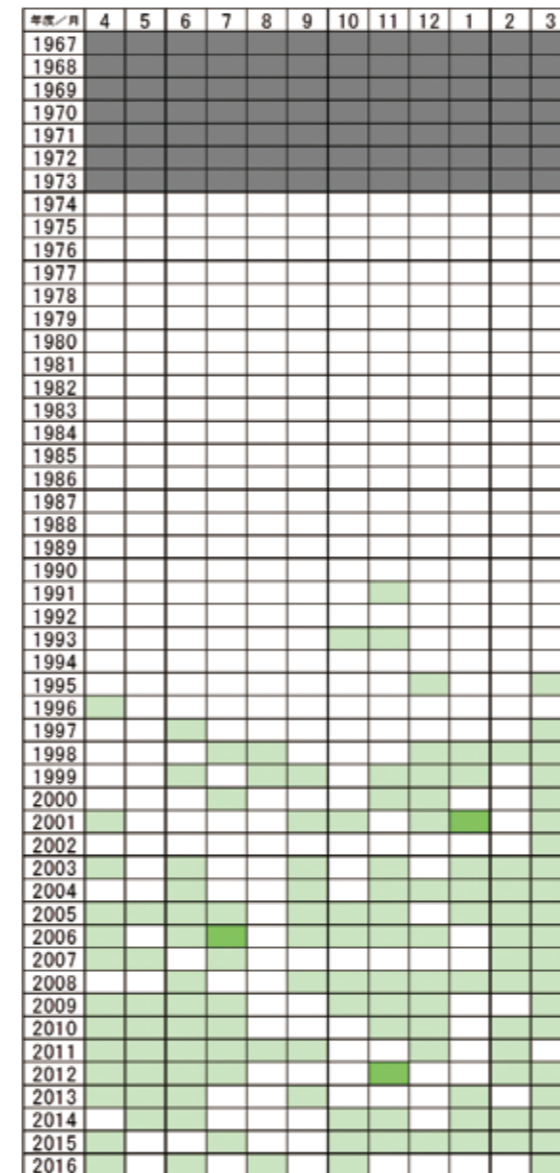
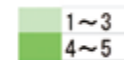
当地のカワウは、池完成後15年経過した1980年頃から、冬季に増加が見られようになった。正確には解らないが、「鶺鴒の山」の分散が原因ではないかと言うことは「鶺鴒の山」の各地への分散が、1970年頃以後から盛んになったことで推測される。

以後、1987年には、12月に初めて100羽以上確認され、1990年代以降増減はあるが、月別100羽近く、それ以上も見られた。1995年、1996年4月の時期に初めて11羽以上のカワウが記録された。2001年頃から、コロニー形成が目立ち、以降、繁殖活動が活発になってきた。さらに2005年から2009年は、年間にわたり高個体数を維持した。その結果、糞による水質汚染悪化が進んできた。このため、2009年11月頃から歩道巡回、爆音、ポール、妨害ロープ、固定サーチライトの発光等の分散対策の

結果、次第に効果が現われてきて、2010年度は4、5月、2月を除き激減した。減少した個体数は、2011年度以降低く推移して、現在営巣は見られない。分散したカワウは、隣地域の常滑市に移動した。

森林内に小規模な崩壊、立木倒伏や枯損

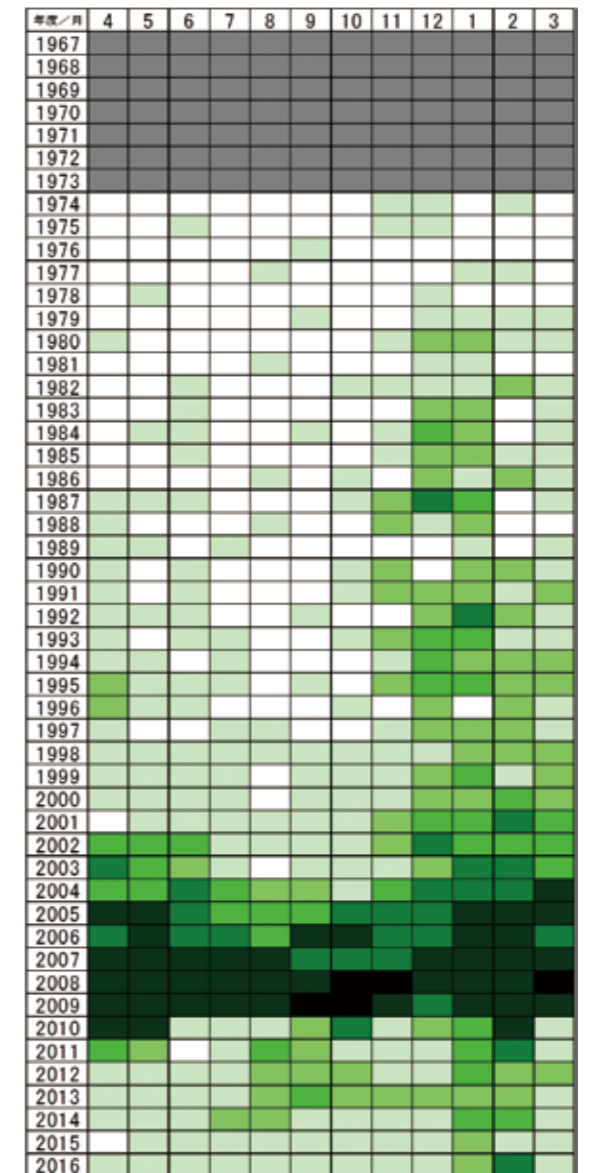
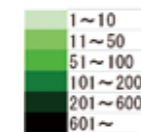
オオタカ



が見られる。計画的に治山工事を施工し、健全な森林保全回復を行い、併せてレクリエーションに活用することで、野生生物の保全が図られると考えられる。

(伊藤 岱二)

カワウ





13 汐川河口 (しおかわかこう) - 水辺 -



1 調査地について

調査地「汐川河口」は、三河湾の最奥部に位置し、田原市東部の汐川河口から豊橋市南西部の杉山町地先にかけて広がる自然の干潟である。面積は約 280ha、満潮時にはほぼ全域が海になり、干潮時には滞筋(みおすじ)を除き、ほぼ全域が干潟になる。基本的には砂泥質の干潟で、西側に粒径がごく細かなシルトを多く含む泥質、東側は粒径がやや粗い細砂質となっている。また、汐川干潟は、外周がコンクリート堤防で囲まれている。堤防内部の後背地は、水田、畑、池などがあり、多彩な環境を有する。

汐川河口と境川河口の広範囲には、ヨ

シ帯が広がっている。主要な植物は、潮間帯上部には、シバナ群落、ハマツナ群落、シオクグ群落、ヨシ群落がある。潮上帯にはハマボウ群落、及びオオバイボタ、マサキなどの低木やセイタカアワダチソウを伴うヨシ群落が成立していて、潮間帯から潮上帯が連続した環境が残り、塩湿地性の植物が分布している。分布域が広いのは、ヨシ群落で、特に汐川と切畑川河口部に発達する。

底生生物はゴカイ、貝、カニなどが確認され、約半数の種を貝類が占めている。コケゴカイ、オキシジミチゴガニなどは、分布域が広く干潟の各所に生息している。

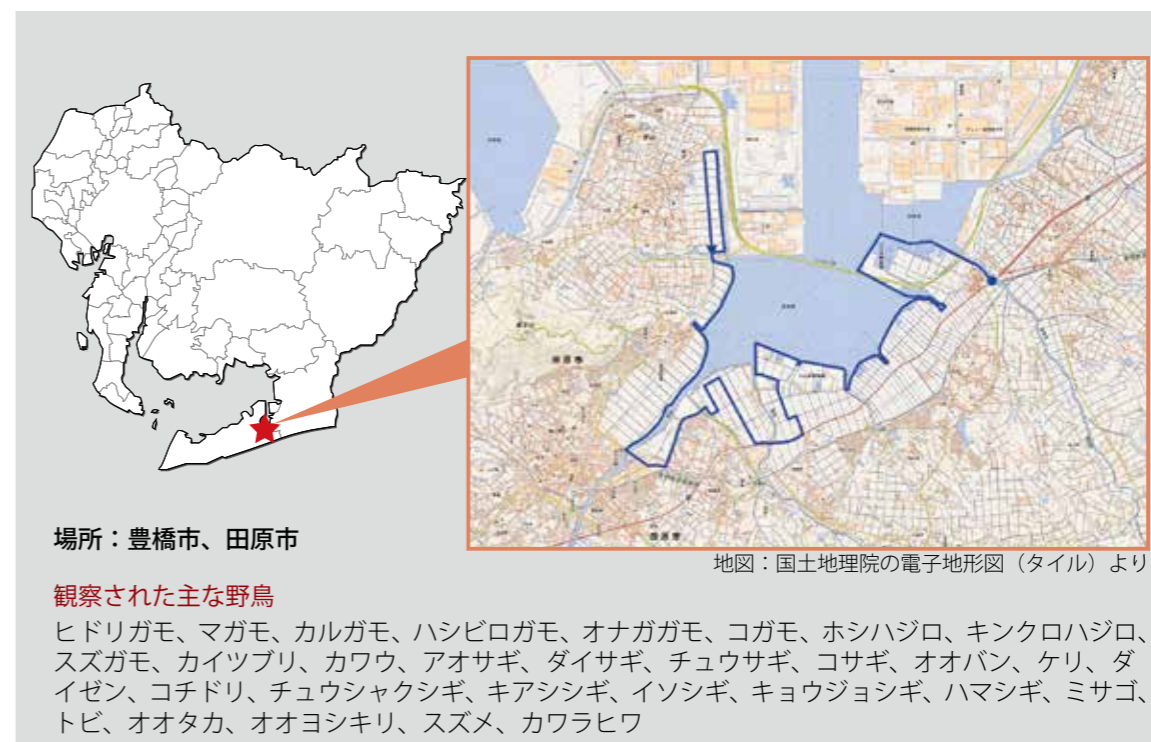
干潟の沖合に生息するオオノガイ、ヨシ群落周辺のみに見られるフトヘナタリ、アシハラガニなどは、分布が限られる。また、干潟の広範囲にカキが高密度に密生してできたカキ礁が見られる。凹凸が多く、この隙間が多くの生き物の生活場所になる。これらの底生生物は、堆積した有機物を捕食、あるいは水中の栄養分をろ過することなどにより、干潟の底質、水質の浄化に役立っていると考えられている。

鳥類はカモ類、シギ、チドリ類の数が多く、全国的な渡り鳥の重要な中継地、渡来地とされ、多くの種類が確認されている。カモ類は、スズガモを中心に冬場に多く観察される。シギ類は、冬から春にかけて多い。ハマシギは、特に冬場に大群で訪れる。シギ・チドリ類は、長距離の渡りをする。他地域で標識を付けた個体が観察され、東アジア地域の重要な中継地となっているようだ。後背地ではオオタカやハヤブサ、チュウヒなどの猛禽類も確認されてい

る。彼らの餌となる小鳥や小動物が周辺に多く生息しているといえよう。シギ・チドリ類も種類によっては、休耕田や畑に現れる。干潟だけでなく、後背地も含めて、多彩な環境を有しているといえる。

明治時代には、2,000haにも及ぶ広大な干潟が広がっていたとされているが、昭和10年代から、梅田川河口沖をはじめとして、埋め立て事業が行われるようになり、昭和47年に田原町緑が浜が、翌昭和48年に豊橋市に有明町が設定され、ほぼ現在の汐川干潟が作られたようだ。この埋め立て面積は年累計で1,732haにも及ぶと言われている。そして、臨海部と埋立地をつなぐ産業道路が建設され、三河港大橋が昭和57年に開通した。昭和47年頃から始まった干潟の保存運動などにより、当初予定されていた干潟の全面埋め立て計画は、汐川河口部を残し中止された。

調査は、車に乗って、堤防上を走り行っている。片側に海(干潟)、反対側に陸(後



場所：豊橋市、田原市

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、オオバン、ケリ、ダイゼン、コチドリ、チュウシャクシギ、キアシシギ、イソシギ、キョウジョシギ、ハマシギ、ミサゴ、トビ、オオタカ、オオヨシキリ、スズメ、カワラヒワ



14 庄内川河口(しょうないがわかこう) - 水辺 -



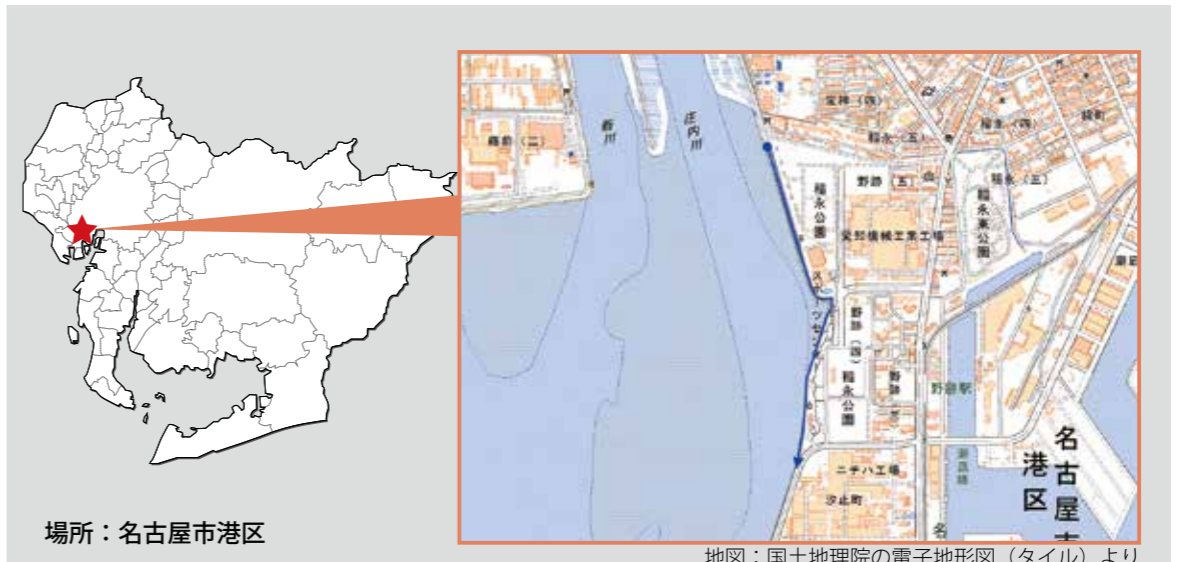
1 調査地について

調査地「庄内川河口」は、岐阜県夕立山に源を発し、伊勢湾に注ぐ。河口には干潟が広がり、水鳥の重要な生息地となっている。庄内川が注ぐ伊勢湾最奥部には、庄内川に隣接する新川及び日光川の河口が集まり、一帯に干潟が広がっている。かつて伊勢湾は広大な干潟を有していたが、高度経済成長期にほとんどが埋め立てられ、この一帯の干潟は市民運動により、かろうじて残されたものである。潮が最も引いたときには、238haの干潟が現れる。干潟の主要部分は「藤前干潟」という名でラムサール条約に登録されてい

る。水鳥はこの一帯を1つの場所として利用しているため、調査も一帯を対象に行っている。調査範囲は国道23号線以南の河口部である。干潟は、潮の干満により刻々と変化するため、調査時の状況に応じ、徒歩及び車で移動しつつ、数か所で止まって干潟及び干潟周辺の水面、堤防上の野鳥をカウントしている。また、移動に際し通過する庄内川河口の東に隣接する稲永公園についても調査している。1年で120種ほど、10数年で200種ほどの鳥が観察されている。多くは水鳥で、

干潟を採餌場、休息地として利用する冬鳥及び旅鳥である。干潟上部の葦原では、カルガモ、オオヨシキリ等が繁殖している。30年位前まではこの葦原でバン、ヨシゴイも普通に繁殖していたが、減少し、現在では繁殖どころか姿を見ることも稀である。これらの減少は当地に限ったことではないので、当地の環境変化以外の理由があるものと思われる。当地の環境はそれなりに保たれているが、周辺は開発が進み、かつてあったコアジサシ、シロチドリのコロニーは失われた。また、当地でもかつてはたくさん生息していたハゼがほとんどいなくなったので、見ているだけでは分からない環境の変化があるものと思われる。当地を代表する鳥は旅鳥、または冬鳥のシギチドリ類である。カモ類やカモメ類も多く、干潟以外の水辺環境にも生息す

るが、シギチドリ類は干潟に大きく依存している。そのシギチドリ類が減少している。これらのシギチドリ類は極北で繁殖し、日本から東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドで越冬する(そのころ南半球は夏だが)。渡りの主要な中継地は黄海沿岸である。この減少には温暖化による繁殖適地の減少、黄海での開発による干潟の減少(1年に10%減少と言われている)が大きく影響しているであろうと推測される。湾の最奥部なので、海鳥の記録は少ないが、台風の時などは、それなりに記録がある。稲永公園ではカワラヒワ、ヒヨドリなどが繁殖している。2017年にはキビタキが繁殖した。渡りの時期には名古屋市南部の希少な緑地として、多くの野鳥が見られる。



場所：名古屋市港区

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、カワウ、ササゴイ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、ダイゼン、シロチドリ、メダイチドリ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、キアシシギ、イソシギ、オバシギ、ハマシギ、ユリカモメ、スズロカモメ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ミサゴ、チュウヒ、ハヤブサ、イソヒヨドリ



15 茶臼山 (ちゃうすやま)

— 山林 —



1 調査地について

調査地「茶臼山」は、愛知県の北東部に位置し、北設楽郡豊根村にある。北は長野県と隣接し標高 1,416m あり、天竜奥三河国定公園に指定されている愛知県における最高峰である。

茶臼山は、年間を通してウォーキングの人や観光客が訪れる県民の憩いの場所である。山頂には南アルプスをはじめ、三河地方の山並みが一望できる展望台もあり、見事で広大な眺望が楽しめる。軽装でも山登りが年間を通して可能であり、初夏には新緑、秋には紅葉が楽しめる。麓に広がる茶臼山高原には、牧場やス

キー場があり、また、休暇村茶臼山高原もあり宿泊施設も整っている。

かつて、この地域は原生林におおわれていたが、1950 年代から開発が進み、高原観光地と変貌していった。冬は、茶臼山の南にある萩太郎山の北斜面には、1986 年に開業されたスキー場があり、多くのスキー客で賑わう。初夏には、2007 年頃から芝桜が植栽され「天空の花園」と銘打ち開設された。現在では、芝桜が山頂付近の山肌一面を覆うようになり、観光客で賑わっている。

春から夏にかけてはオオルリ、キビタ

キ、コルリ、ミソサザイなどが賑やかに囀り、現在でも何とか残っている原生林に、美しい鳴き声が響いている。

冬には、マヒワ、アトリ、ベニマシコ、ウソ、稀にハギマシコやオオマシコも見ることができる。

年間を通して、ウグイス、ホオジロ、ヒガラ、コガラなどが生息している。

しかしながら、近年は、亜高山帯・高原性の夏鳥であるノジコ、コマドリ、マミジロ、アカハラ、ホオアカなどが県内で最後の繁殖地であった当地域においても、確認できなくなりつつある。これは、当地域の自然環境が壊されていることが起因しているものと思われる。さらに、国や世界規模の環境変化によって、影響をうけていることも推測される。今後さらに、種によっては生息範囲が狭められる可能性があり、大いに危惧される。

一方、個体数が急速に増えている種も

ある。外来生物法の特定外来生物に指定されているソウシチョウである。すでに関東地方をはじめ、全国的に生息地域は拡大しつつあったが、この茶臼山周辺でも 2007 年から確認されるようになり、現在では、春から秋にかけては、いくつかの群れで森中を賑やかに鳴きながら動き回り、他の鳥たちを圧倒している。

このように、本調査の開始から 35 年が経過し、茶臼山周辺で生息する鳥たちの種類や個体数は大きく変化している。とりわけ、高原性の繁殖種が急速に減少しており、さらに減少傾向が加速されることが懸念される。

この茶臼山高原においても、多くの観光客の誘致のため、関係者がいろいろ知恵を絞り、努力しておられるが、自然環境への十分な配慮も心掛けていただくことを期待する。



場所：北設楽郡豊根村

地図：国土地理院の電子地形図 (タイル) より

観察された主な野鳥

カイツブリ、キジバト、アオバト、ホトトギス、カッコウ、トビ、ノスリ、コゲラ、アカゲラ、カケス、ハシブトガラス、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ミソサザイ、コルリ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、セグロセキレイ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、イカル、ホオジロ、ソウシチョウ



16 闇苧 (くらがり)

— 山林 —



1 調査地について

くらがり溪谷は、本宮山県立自然公園の南西部に位置し、矢作川水系男川の源流になっている。自然が豊かなくらがり溪谷は、「岡崎観光きらり百選」と「岡崎・水とみどりの森の駅」に指定されている。

溪谷に沿って標高 789m の本宮山の山頂や砥鹿神社の奥の院へと続く登山道は、一般車両の乗り入れが禁じられており、ハイキングや森林浴、川遊びなど、自然そのものに親しんだり、楽しんだりすることができる。

溪谷内には、バンガロー村、テント村コテージ、ログハウス、デイキャンプもできるバーベキュー場などの施設が充実

しており、マス釣りやマスつかみなどの川遊びやハイキングなどを中心としたアウトドアが楽しめる人気のスポットになっている。また、くらがり紅葉まつり、くらがり感謝祭、自然観察会などのイベントも開催されている。

くらがり溪谷の四季を通じた魅力の多様さ、四季折々の溪谷美には定評があり、春は新緑と野鳥の囀り、夏は涼しい清流とカジカの鳴き声、秋は溪谷を赤黄に染める紅葉、冬には富士山、御嶽山、南アルプスの山々を眺めることができる。

また、本宮山の山頂付近からは豊橋平野、渥美半島、三河湾を一望することが

できる。

くらがり溪谷の登山口から本宮山にかけての山林は、スギ・ヒノキが植林された人工林が多くを占めているが、溪流沿いや岩場にはアラカシ、シラカシ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなどの常緑樹や針葉樹のアカマツ、落葉広葉樹のコナラ、イロハカエデ、コハウチワカエデ、シラキなどが分布している。この付近の谷間の崖にはシシランの群落、岩の下の斜面にはサンショウソウ、ヤマアイ、ワサビ、イヌショウマなどが見られ、溪流の岩にはカタヒバなどの群落が見られる。また、野生生物が数多く生息し、ニホンザル、ニホンジカ、ムササビなどの姿をよく見かける。近年は国の特別天然記念物であるニホンカモシカの生息も確認されている。

調査ルートは、くらがり溪谷の登山口から約 800m の所にあるくらがり山荘から一ぜん飯休憩所までの約 3km の登山道

で、標高約 270m から 490m にかけての区間で、約 220m の標高差を溪流沿いにゆるやかに登って行く。

調査担当者は、1983 年からの 11 年間は、くらがり山荘で働いていた故菅沼高吉氏が担当し、その後は、くらがり溪谷を学区とする岡崎市立宮崎小学校で、愛鳥活動の指導を行ってきた筆者が引き継ぎ、現在に至っている。

この区間に大きな環境の変化はなく、溪流の水音のために野鳥の鳴き声が聞き取りにくい場所もあるが、どこの地点でも同じような種類の野鳥を観察することができる。

この調査では、23 科 46 種類の野鳥を確認している。主にキセキレイ、カワガラス、ミソサザイなどの溪流の野鳥とシジウカラ、ヤマガラ、メジロ、カケス、ヒヨドリ、ホオジロ、オオルリなどの山林の野鳥を観察することができる。



場所：岡崎市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

ツツドリ、コゲラ、カケス、ヤマガラ、シジウカラ、ヒヨドリ、メジロ、ミソサザイ、カワガラス、ルリビタキ、キセキレイ、アオジ



17 段戸裏谷 (だんどうらだに) — 山林 —



1 調査地について

調査地「段戸裏谷」は、北設楽郡設楽町地内の西部に位置する。樹齢 200 年以上のモミ・ツガなどの常緑針葉樹に、ブナ・ミズナラなどの落葉広葉樹を交えた冷温帯林である。特に、モミは樹高 30m に達し、ミズナラは樹幹周り 5m にもなる大木が林立する。林床は、一面にスズタケが自生し、太平洋側ブナ・スズタケ群団を形成している。県内最大級の原生林で、自然林は愛知営林署の 39～44 林班で約 156ha、モミ・ツガ植物群落保護林は約 14ha である（設楽町誌，1996）。その標高範囲は 900m～1,100m で、駐

車場付近は 917m である。調査コースは、駐車場東側の歩道から開始し、約 200m 歩くと県道 365 号線と合流する。県道を南へ約 200m 進むと、右手に自然観察路入り口の案内板がある。さらに観察路を約 2km 歩くと、東西を横切る車道（林道）の五六橋に出る。その車道を西に 500m 進み、再び自然観察路に入る。北西に約 1.2km 歩くと寧比曾岳方面へ続く東海自然歩道と合流する。その方向へ約 1km 進むと、原生林との境で、スギ・ヒノキの植林地になる。ここで U ターンし、東海自然歩道を約 1.3km 戻ると、再び車

道に合流する。車道に出たら東へ約 1km 行き、「車両通行禁止」のゲート脇を約 100m も歩くと、左手に段戸湖を望む。さらに約 300m 進むと、開始地点に到着する。調査時間は約 5 時間である。

調査は 1972 年 5 月から実施し、現在も継続中である。45 年間に記録された野鳥は、16 目 37 科 108 種だが、筆者が観察していない種が 2 種含まれている。1995 年 5 月 7 日に段戸湖にてキアシシギ 1 羽が倉多利通、清水正義両氏によって観察、撮影された。1983 年 6 月 23 日にオオコノハズクが落鳥し、柿本浩氏によって拾得された。筆者作成の目録にはハヤブサとヒメアマツバメの 2 種も加えたが、証拠写真等の情報不足のために除外する。

確認種の中で 1 回だけの記録を列挙すると、以下の種が挙げられる。マガモ、

ミコアイサ、カイツブリ、オオハム、カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、ササゴイ（2017 年 9 月 9 日）、アオシギ、キアシシギ、オオコノハズク、サンコウチョウ、アカモズ、ホシガラス（落鳥）、キレンジャク、スズメの 16 種である。うち、8 種は水鳥で、湖があることにより、県内奥地の森林でも飛来する。特筆に値する種としては、1994 年 5 月 4 日にオオハムが渡来し、29 日まで留まる。その間に冬羽から夏羽へと換羽した。（愛知県 1995）。スズメはおもに、住宅地に生息するが、1973 年 3 月 5 日に 1 羽を確認する。今では考えられないが、当時は営林署の社宅や田峰小学校裏谷分校、それに民宿もあり、その敷地内である。現在は、社宅と民宿は無人的となり、分校跡地は豊川市の宿泊施設が建った。

場所：北設楽郡設楽町

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥
 キジバト、アオバト、ホトトギス、ツツドリ、トビ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、アオゲラ、サンショウクイ、モズ、カケス、ハシブトガラス、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、ミソサザイ、クロツグミ、コルリ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、アトリ、マヒワ、イカル、ホオジロ



18 鍛冶屋敷 (かじやしき)

— 山林 —



1 調査地について

調査地「鍛冶屋敷」は、愛知県の北中部に位置している。昔は東加茂郡小原村であったが、現在は豊田市になっている。

調査地までのアクセスは、公共交通機関の場合は豊田市駅からおいでんバス小原豊田線上仁木行きで約1時間である。乗用車利用の場合は猿投グリーンロード中山IC、または東海環状自動車道豊田藤岡ICより国道419号を瑞浪方面へ約25分である。冬季は道路が凍結することがあるので、冬用タイヤでの走行となる。道路は結構アップダウンがある。

鍛冶屋敷は豊かな自然と文化に恵まれ

たところである。春にはミツマタ、初夏にはササユリ、秋には紅葉や四季桜など、四季折々の草花や鳥の囀りが私たちを迎えてくれる。

調査地は矢作川の上流になる百月ダム付近から小原の市場までである。約2時間の徒歩調査となる。

百月ダムは、矢作川が堰堤でせき止められていて、大きなダム湖のようになっている。堰堤にある管理事務所の横からは、対岸の淵の入り込んだところに、冬季はオシドリがペアで休んでいるところが観察できる。また、対岸から湖面に出

ている木の枝にヤマセミが止まっていることがある。時にはダム湖の湖面の上を飛翔することもある。矢作川にかかる橋の上からダム湖の堰堤方向や橋の下を見ると、カワセミやカワガラスの飛翔を観察できることもある。

岩倉から坊洞間まではかなりの坂道で勾配があり、カーブもある。冬季はジョウビタキ、ルリビタキや時にはベニマシコを見ることがある。以前はウソ、マヒワ、カシラダカ、ミヤマホオジロが普通に観察できたが、近年はほとんど見ることができなくなった。夏季には、キビタキ、ヤブサメ、オオルリ、センダイムシクイ、サンコウチョウ等の囀りを聞くことができる。また、サシバがピックイーピックイーと鳴きながら飛翔しているのが観察できる。集落へ入るところは里山となっていて、田畑があり、カエルやヘ

ビがたくさんいるので、サシバの餌場になっていると思われる。秋には幼鳥も観察されているので、おそらく繁殖しているのだろう。また、2015年頃から、夏季にはサンショウクイも確認できるようになった。

さらに田代川沿いに歩くと、夏季にはサンコウチョウの囀りを聞くことができる。秋の渡りの時期には、ノビタキ、ハチクマ、アマツバメを見ることがある。

2 鍛冶屋敷における特徴的な変化 オシドリ

オシドリはほぼ毎年冬季に渡来している。1990年代前半で40羽前後が最大となり、その後は10羽前後に減少している。

ヤマセミ

ヤマセミは2000年代までは周年確認



場所：豊田市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

オシドリ、ホトトギス、サシバ、ノスリ、カワセミ、ヤマセミ、アオゲラ、サンショウクイ、サンコウチョウ、ヤマガラ、ヤブサメ、センダイムシクイ、カワガラス、シロハラ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、ベニマシコ



19 香嵐溪 (こうらんけい)

— 山林 —



1 調査地について

調査地「香嵐溪」は、豊田市足助町にある矢作川の支流巴川がつくる渓谷である。春は新緑、秋は紅葉の名所として、県民に親しまれている。当地は足助鳥獣保護区 328ha(1967 年指定)のうち、特別保護地区 35ha(1968 年指定)の区域内にある。また、足助鳥獣保護区全域は、愛知高原国定公園の特別地域に指定されている。

調査は 1974 年から始まり、2010 年に調査員の交代があり 42 年が経過した。当地は前述のように、鳥獣保護区特別保護地区に指定されていることから、樹木などの成長による変化はあるものの開発によ

る大きな環境変化は見られない。一方で、観光地として、客を増やすための施策や橋の新增設、ライトアップ、イベントの増加、間伐や草刈りの促進、拡声器による放送など、観光地ゆえの問題があると指摘されている。

当地は秋の紅葉の他に、飯盛山の春のカタクリの花が有名で、県内だけでなく近県からも多くの観光客が訪れる。夏は川遊びの人たちで賑わい、釣人も入る。しかし、これらの時期を除けば訪れる人は多くない。

調査コースは、国道 153 号線の足助大橋の巴川右岸を起点に、上流の香嵐溪

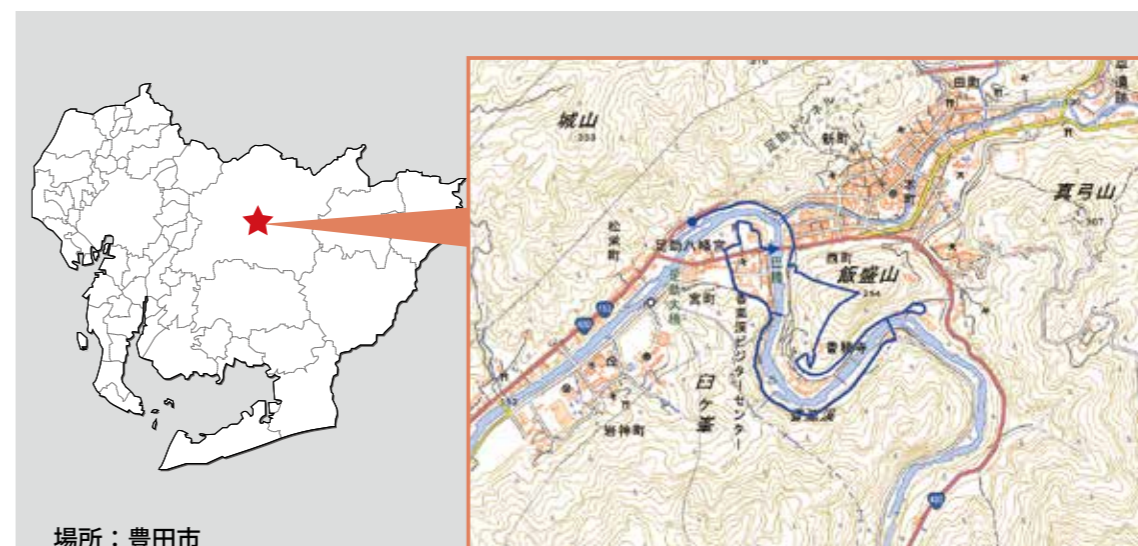
に向かう。西町駐車場から飯盛山(標高 254m)に登り、香積寺に下り、上流の一の谷へ行き、そこで引き返す。吊り橋(香嵐橋)を渡って左岸を下り、足助八幡宮を通過して巴橋を終点とする。このコースは巴川、飯盛山、香積寺の参道、足助八幡宮の境内など変化に富んだ環境で、「山野の鳥」と「水辺の鳥」の両方の野鳥が観察できる。

巴川にはカルガモ、カワセミ、カワガラス、キセキレイ、セグロセキレイなどが周年生息し、ヤマセミも姿を見ることがある。夏季にはイワツバメが巴橋の橋桁で毎年繁殖する。冬季には足助八幡宮の裏にオシドリ、マガモが飛来する。飯盛山などでは、コゲラ、シジュウカラ、ウグイス、エナガ、メジロ、イカルなどが周年生息し、夏季はサンショウクイ、キビタキ、オオルリなど、冬季にはシロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、アオジなどが観察できる。また年によってはアトリ、マヒワの大群に出会うこともある。

2 香嵐溪における特徴的な変化

43 年間の調査で、14 目 35 科 96 種の鳥類を記録した。他に外来種 3 種を確認している。記録種の 96 種を便宜的に「山野の鳥」と「水辺の鳥」の 2 つに分類して比較すると、山野の鳥が 79%、水辺の鳥が 21%となる。当調査地には巴川が流れているが、山に挟まれた渓谷となっているため山野の鳥が主体であり、調査地のカテゴリーは山林となっている。

当地の代表ともいえるカワガラスとキセキレイに大きな変化は見られない。カワガラスは絶滅危惧種に選定(レッドリストあいち 2015 の絶滅危惧Ⅱ類)されており、観光地という環境で、普通に観察できることは貴重である。両種とも、ここでの繁殖が確認されている。一方、香嵐溪を流れる巴川のシンボルともいえるヤマセミは、1991 年頃から年に 1~2 度しか観察できなくなり、最近ではさらに観察回数が少なくなった。



場所：豊田市

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

オシドリ、マガモ、カルガモ、アオサギ、トビ、カワセミ、ヤマセミ、コゲラ、サンショウクイ、カケス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、カワガラス、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、セグロセキレイ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、ホオジロ、アオジ



20 栗代 (あわしろ) — 山林 —



1 調査地について

調査地「栗代」は、東三河の東栄町の北端に位置し、標高 400 m 前後、大千瀬川の上流部の民家が点在する県道沿いの山間部である。

名古屋方面からは 3 時間程かかり、交通のアクセスは悪い。

調査は 1983 年から実施されている。

周辺の山地は、大部分がスギ・ヒノキの植林地であり、川沿いの調査ルートは、川の畔のわずかな田んぼや畑も、休耕で荒れたり、植林されたりしている場所で、鳥類の生息数は少ない。

キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、キジバト、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガ

ラス、ハシボトガラスなどが周年生息し、冬季にはツグミ、シロハラ、ジョウビタキ、カワガラスなどが観察される。

調査区分は山林であるが、調査地は民家が点在する県道沿いで、放棄田などがあり、いわゆる山地とは様子が異なる。

調査地周辺地域の広い範囲では、ホトトギス、ツツドリ、サンショウクイ、アカゲラ、アオゲラ、カケス、メジロ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、イカル、ノスリ、オシドリなど、山林を主な生息地として利用する種が繁殖している。

ハチクマ、ヤマセミも見られ、ヨタカ、トラツグミ、クロツグミ、コマドリ、ビンズイ、アカ

シヨウビンなどの声が聞かれることもある。

冬季はハイタカ、キクイタダキ、コガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、カヤクグリ、アトリ、マヒワ、ウソ、クロジなども見られることもある。

調査ルートも短く、観察視野も限られているために、周辺で繁殖しているオシドリ、ミソサザイ、ヤブサメなど山林を利用している多くの種が抜け落ちている。

調査地を変えれば、山地の山林の鳥類の生息状況を把握出来ると思われる。

里山、山地、水辺という環境区分で分類し比較するのであれば、それに相応しい場所が必要であろう。

周辺地域では、外来生物法の特定外来生物であるソウシチョウも観察されている。藪の中で営巣するために、同じように藪で繁殖するウグイスなどに悪影響があることが知られている。営巣場所にカケスなどの捕食者が誘引されるなどの事例も知られ、近年の爆発的な個体数の増加が、在来種に影響を与えている可能性が

指摘され、鳥類相が変化しているとの報告もあり危惧される。調査地を含め、周辺地域の今後の生息状況を把握していくことが必要である。

近年周辺地域を含め、ニホンカモシカは従来から見かけていたが、ニホンジカとツキノワグマが高頻度で見られる様になっている。後者の 2 種は増加してきていると思われる。

定量的な調査以外にも、鳥類調査の折りに観察状況を収集して、動向を把握していくことが必要である。

ただし、増加という単純な数字だけで判断して、駆除という人間の奢った行為に直接結びつかないように願いたい。

当地域は、冬季、道路が凍結している場合も多く、特に夜間や早朝の移動には注意が必要である。

本調査は、直接の目視観察が主な調査方法であるが、種の生態により確認頻度が異なるため、それぞれに適した調査方法を取らなければ、正確な状況を把握することは難しい。





21 県民の森 (けんみんのもり) — 山林 —



1 調査地について

調査地「県民の森」は、新東名高速道路新城ICより北東の方向に約15kmの新城市内（鳳来地区）にあり、JR飯田線三河榎原駅から徒歩約15分と比較的交通の便も良く、面積は572ha、沢山のハイキングコースがあることから、自然観察やキャンプ、ハイキングなどレクリエーションの森として広く親しまれている。最近では、トレイルランニングをする人によく見かける。地形は急峻で標高120m～730m、川沿いには安山岩の岩脈、風穴、雨樋なども見られる。この辺りは亀石の滝、蔦の滝なども見られる鳳来溪と呼ば

れる溪谷で、火山岩からなる白い河床が新緑や紅葉を引き立ててくれる。また、生活と樹木、県の木、外国樹種などの展示林も整備されている。ハイキングコースは全長30kmで、植物では季節ごとに、春はホソバシャクナゲ、初夏にはホウライジユリ、秋にはもみじ、ハナノキなどの紅葉が見られる。山の7割はスギ、ヒノキ、マツで、3割がカシ、シイ等の常緑広葉樹である。哺乳類では、ニホンザル、カモシカ等が見られ、ツキノワグマも最近では、目撃されている。

県民の森は、1967年から50年間調査が続けられている調査地である。

調査区域は、県民の森駐車場を起点とし、森林学習館、多目的広場、宿泊施設「モリトピア愛知」を経て、いったん木和田林道をおしどり池まで行って戻り、再び大津谷川沿いを大芝生広場、県の木展示林、かえで展示林、木材生産展示林などを経て、明治百年広場までの片道約3.5kmである。2017年春に駐車場の大木が伐採されたり、部分的なエリアが伐採されているが、全体的には自然環境はよく保たれている。

春には、オオルリ、キビタキ、センダイムシクイなどの夏鳥の姿を見たり、囀りをあちこちで聞くことができる。

また、ウグイスの囀りがあちらこちらから聞こえてくる。

夏は少なくなるが、カワラヒワ、セキ

レイ類、カラ類が見られる。

秋から冬では、ジョウビタキ、ルリビタキ、シロハラなどが観察される。

年間を通して、ヤマガラ、シジュウカラ、エナガ、コゲラ、ヒヨドリ、メジロなどよく見られる。

特に、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、メジロ、コゲラの混群にしばしば出会う。

かつては少なかったサンショウクイは近年、確認する機会が増えている。稀に、ミヤマホオジロ、クロツグミ、カワガラス等が見られ、楽しみとなっている。

水鳥はカルガモ、カワセミ、サギ類が稀に見られるのみである。

猛禽類では、トビ、オオタカ、サシバ、ノスリの記録はあるが、クマタカについては、この周囲の山間部では確認されるが、県民の森では現在まで記録はされていない。



場所：新城市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

キジバト、トビ、コゲラ、アオゲラ、サンショウクイ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、ホオジロ



22 古山 (こやま)

— 水辺 —



1 調査地について

調査地「古山」は、愛知県最南端に位置し、東西に伸びる渥美半島の先端部にある標高 85.7m の小さな山である。周りは岩礁海岸となっていて太平洋と伊勢湾に面し、山全体はヤブツバキやカクレミノ、トベラ、タブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、ヒメユズリハ、ハマヒサカキ、カラスザンショウ、ウバメガシなどで形成される照葉樹林に覆われている。

調査地内にある気象庁伊良湖特別地域気象観測所のデータによれば、年間平均気温 16.0℃ (名古屋と比べるとおよそ夏季は 1℃ 低く、冬季は 1℃ 高い)、年間降

水量 1,603mm と、温暖な海洋性気候である。ただし、秋から初冬にかけての季節風は強く、1日の平均風速が毎秒 10m を超える日がしばしばあり、体感温度はかなり下がる。

古山調査地は、古山と東に隣接する宮山 (標高 149.5m= 宮山原生林: 国指定天然記念物を有する) と骨山 (標高 109.7m) の山麓を周るコースとなっている。国道 42 号線上の堀切信号から始まり、国道を西進する。さらに骨山山頂にあるビューホテルに至る側道に進入・往復し、国道に戻り、さらに西進して恋路ヶ

浜の駐車場に至る。そこからまた国道に戻り、伊良湖港の海岸線を辿り伊良湖魚市場から国道 259 号線に入る。国道を北進し伊良湖集落の北端で旧フラワーセンターに至る市道に折れ、田園地帯を横切り国道 42 号線に合流して調査開始地点に到達する。途中、日出園地の駐車場 (骨山山麓) とビューホテルの駐車場 (骨山山頂)、恋路ヶ浜の駐車場 (古山山麓)、伊良湖港、宮山北山麓が 30 分程度の定位観察地点である。それらを含め、調査時間は約 4 時間である。

調査地のカテゴリーは「水辺」となっているが、コース周辺には海洋、山地、耕地 (畑や水田) が含まれ、多様な鳥種が観察される。特に調査地は、外洋に面しているため、シロエリオオハムやカンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、オオミズナギドリ、クロサギ、クロガモ、ウ

ミアイサ、アカエリヒレアシシギ、カモメ類、アジサシ類、ウミスズメなど海鳥の出現割合が多い。更に、多くの鳥たちの春秋の渡りの移動のコース上に位置し、シーズンには、サシバやハチクマ、ノスリ、ツミ、ハイタカ、チゴハヤブサといったタカ・ハヤブサ類をはじめ、ツバメやヒヨドリ、ハクセキレイ、メジロ、カワラヒワ、アオジなどの小鳥が多数観察される。



場所：田原市

地図：国土地理院の電子地形図 (タイル) より

観察された主な野鳥
ウミアイサ、カンムリカイツブリ、シロエリオオハム、オオミズナギドリ、ヒメウ、ウミウ、ミツユビカモメ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、ミサゴ、ハチクマ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、ハヤブサ、ウグイス、シロハラ、イソヒヨドリ、キセキレイ、ホオジロ



とは難しかったが、最近では古山周辺で観察例が増えてきた。渡去前には大きな群れを形成することもある。



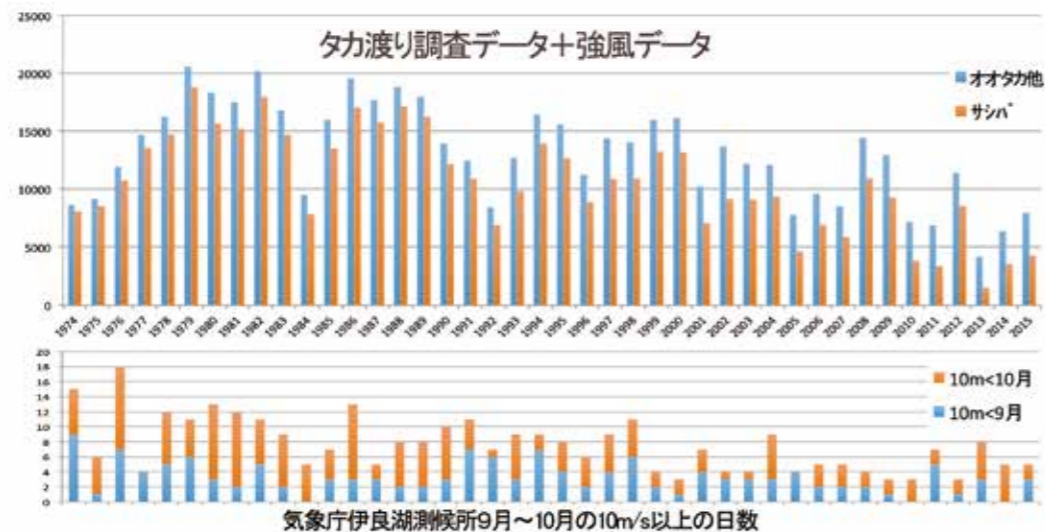
サシバ

古山付近での記録は、ほぼ春秋の移動個体である。本調査の記録では、本種の増減は語れないので、Web上に公開されている伊良湖岬の渡り鳥を記録する会の調査記録を基に、主に秋季の渡去数の減少について触れておきたい。

当地でのサシバの渡りは、1972年に緒方清人氏らにより再発見された。1974年から辻淳夫氏らにより渡去数の調査が行われ、その後、前記の「記録する会」に引き継がれた。それによると、1991年までは15,000羽前後が記録されていたが、それ以降になると10,000羽前後に落ち込んだ。2005年からは5,000羽前後と半減してしまい、2013年には1,500羽と過去最低の記録となっている。

昭和後期のサシバの渡去数の減少は、生息地とされる低山の開発と、エサ場となる水田の乾田化が大きな要因と考えられる。しかし、最近の地球規模の気候変動や温暖化により、9月下旬から10月上旬にかけて強い季節風が発生しないことが多々ある。

それにより地上のあちこちに大きな上昇気流が発生し、より高く上昇することが可能となり、その位置から直接対岸の紀伊半島をめざす集団が現れる。それらは、山などの吹き上げ気流が発生する地形を頼ることなく、海上等を通ると推測される。それは、サシバの群れが伊良湖岬上空を通過しないことを意味する。太古から、伊良湖岬で見られたサシバの渡り、更には多くのサシバが集まり渦を巻いて上昇する「鷹柱」が見られなくなるのは寂しい限りである。



ノスリ

秋季の記録は大部分が渡り際の移動個体である。1980年代までは渥美半島では稀な鳥であったが、水田の乾田化や畑地化で、ノスリの好む環境が増えたためか、越冬個体は増加している。

ノスリ

1~10
11~50
51~100
101~200



年度/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1967												
1968												
1969												
1970												
1971												
1972												
1973												
1974												
1975												
1976												
1977												
1978												
1979												
1980												
1981												
1982												
1983												
1984												
1985												
1986												
1987												
1988												
1989												
1990												
1991												
1992												
1993												
1994												
1995												
1996												
1997												
1998												
1999												
2000												
2001												
2002												
2003												
2004												
2005												
2006												
2007												
2008												
2009												
2010												
2011												
2012												
2013												
2014												
2015												
2016												

ウグイス

松の1次林から照葉樹林への変遷が進んだこと、海岸域で竹林や笹林が増えていることから、増加傾向にある。以前は冬鳥であったこの種が、留鳥のカテゴリーになった。(渡邊 幸久)

ウグイス

1~4
5~10
11~14



年度/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1967												
1968												
1969												
1970												
1971												
1972												
1973												
1974												
1975												
1976												
1977												
1978												
1979												
1980												
1981												
1982												
1983												
1984												
1985												
1986												
1987												
1988												
1989												
1990												
1991												
1992												
1993												
1994												
1995												
1996												
1997												
1998												
1999												
2000												
2001												
2002												
2003												
2004												
2005												
2006												
2007												
2008												
2009												
2010												
2011												
2012												
2013												
2014												
2015												
2016												



愛知県内での現状

ソウシチョウの原産地は中国南部からヒマラヤ山脈南西部であり、標高 1,000 ～ 3,000 m 程度で繁殖する。当時県内でソウシチョウの繁殖適地ではないかと思われていた環境で最初にソウシチョウが確認されたのは、2000 年 8 月 15 日に設楽町段戸裏谷にて 1 羽が確認(緒方,2005)されたのが最初の記録であろう。以後、同調査地では繁殖期に個体数の急激な増加が認められており、現在もその数は県内で最も多い。

愛知県鳥類生息調査の資料によると、ソウシチョウは 4 ～ 10 月まで繁殖地に滞在していることが観察されている(愛知県, 2017)。ただし、繁殖期の 4・5 月に確認された場所でも、その後は越冬期の 11 月以降まで確認されない例もある。とりあえず 6・7 月に確認されている場所を、ソウシチョウの安定した繁殖場所と推定して、最大数をグラフに赤色で表し、越冬期と思われる 12・1・2 月の最大数を、同一のグラフに青色で表した。なお、県内 22 箇所の調査地の中で、ソウシチョウの記録があり、グラフに表されていない調査地は、名古屋市千種区平和公園のみである。この平和公園では、2006 年 11 月 19 日に 1 羽、2007 年 4 月 15 日に 5 羽、2010 年 11 月 21 日に 2 羽の 3 回記録されている。

ソウシチョウの繁殖分布については、2000 年頃より標高 1,000m 程度の原生林や、二次林の環境で繁殖が始まり、その後の 10 年間でさらに標高の高い高原や、300m 以下の低山まで繁殖分布を拡げてきた。その増加量をみると、段戸裏谷において最も顕著な増加がみられることから、標高が高く広葉樹の老齢木が多い原生林の環境がソウシチョウにとって、繁殖に最も適していることが推測される。

越冬については、茶白山や段戸裏谷等、積雪量の多い地域ではソウシチョウの越冬は困難であることが推測される。

積雪量が少ない標高 250m 以下の新城市県民の森では、2010 年以降に越冬期と繁殖期に生息が確認された。県内における繁殖分布の標高が低下してきたのもこの頃と思われる。

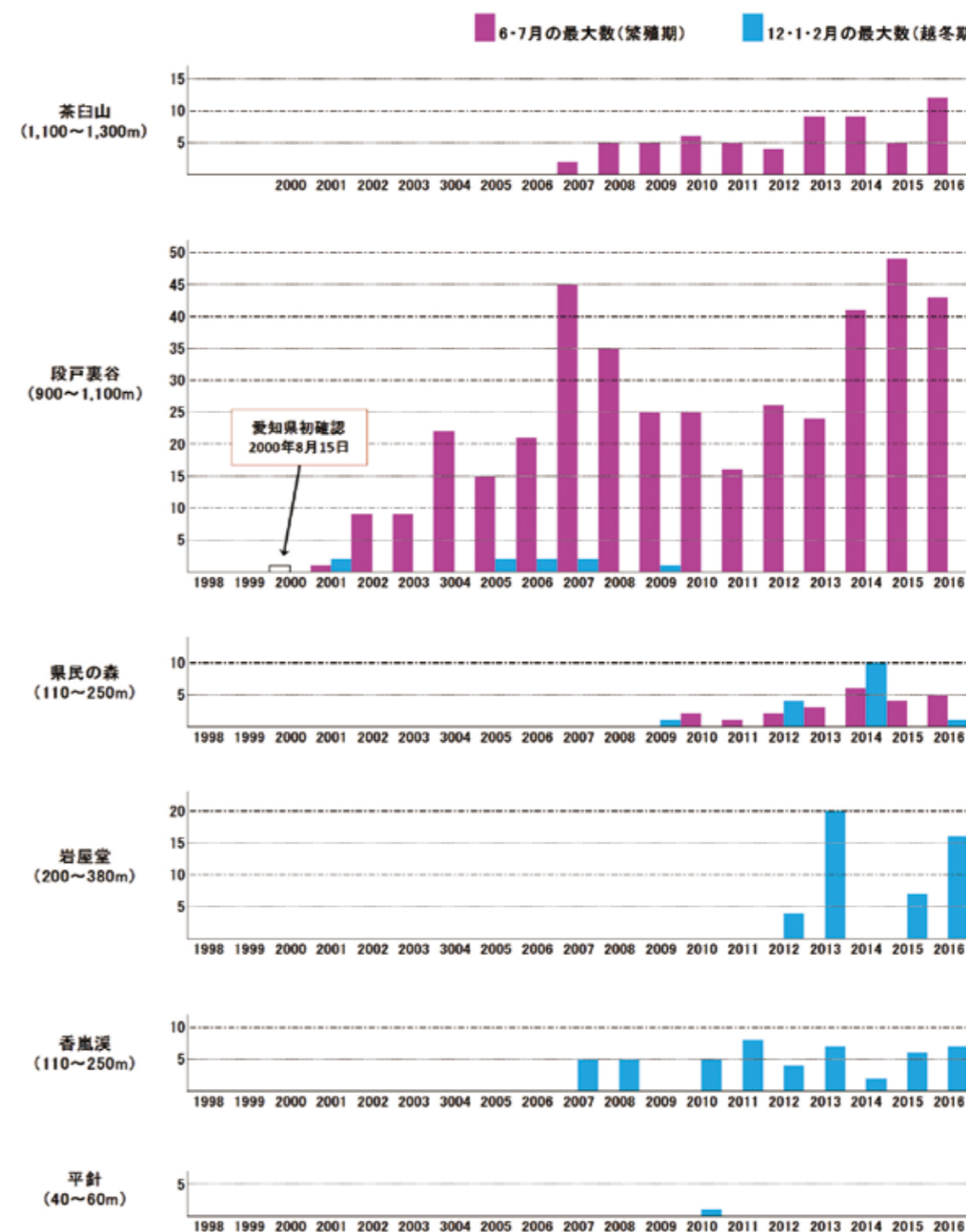
愛知県鳥類生息調査以外の確認記録をみても、県内におけるソウシチョウ本来の繁殖環境は愛知・岐阜・長野県境の三国山から寧比曾岳を経て、茶白山から離山に至る標高 700m 以上の東部山岳地帯に分布し、植生は原生林か二次林で林床に笹類の繁茂した環境である。この環境は、県内におけるコルリの繁殖分布にほぼ重なっている。

県民の森以外で、標高の低い場所における 6・7 月の確認記録は 2014 年に豊田市三河高原牧場 1 羽、2016 年に豊田市下川口町で 1 羽、2017 年に岡崎市木下町で 8 羽、同市小呂町で 2 羽、豊田市押井町で 2 羽、同市足助町で 1 羽となっている(筆者確認)。繁殖については、2017 年 5 月 6 日に豊田市自然観察の森で、巣とヒナが観察されている(大熊私信)。

本来標高 1,000m 程度と思われていた繁殖場所が徐々に標高の低い場所へと拡大しており、現在では平野部近隣の丘陵地でも繁殖が確認されるようになった。

以前オーストラリア北東部で野鳥の観察をしたことがあるが、平野部から山の上の砂漠地帯まで、どこへ行っても移入種カバイロハッカの声が溢れていてウンザリした思いがある。同じく音色も多様で複雑な囀りではあるが、日本の里山にあの騒がしいソウシチョウの声は似合わないと思われる。

ソウシチョウの県内分布



(高橋 伸夫)



段戸裏谷での現状

今は亡き原田猪津夫先生から、1枚の写真を見せていただいた。設楽町田口で拾得された、ソウシチョウの死んだ落鳥個体であった。確か1998年8月だったと記憶している。これが、初めて目にするソウシチョウであった。前田茂雄氏は同年11月8日に豊田市で標識調査を実施され、4羽に標識された(前田, 1999)。このように愛知県に侵入した年は、どうもこのころと思われる。段戸裏谷で初めて確認されたのは、2000年8月15日の1羽ある。さらに9月に1羽、10月に6羽と記録している。2002年になると4～10月にかけて毎月記録され、最多で25羽を記録する。これを機に、毎年増加傾向にあり、2016年10月には125羽を記録する。2010年以降は月毎に40～60羽を、普通に記録するようになった。本調査区では優占種になったが、環境省の特定外来生物に指定されており、営巣場所が競合するウグイスやオオルリが駆逐される危険があり、危機を感じる。

本調査区における年間の推移は、極めて明白である。低山や都市近郊の雑木林等、暖地で越冬していた個体が繁殖のために一気に戻ってくる。遠くまで聞こえる囀りで、その存在を知る。クロツグミの囀りにやや似ているが、それよりも強くググッとカジェジェと濁った声も混ざる。非常に賑やかで、熊笹の中でも、頭上の枝を移動しながらも囀る。繁殖期は長く、9月中旬ごろまで続き、オスは10月の渡去寸前まで囀る。ウグイスも8月末ごろまで囀ることを聞くこともあるが、秋期まで囀ることはない。11月になると記録されない年もあり、12月では過去4例しかない。厳冬期の1月は無く、2月と3月は1例だけである。

年度/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
2000					1							
2001			1			1	6					
2002	25	2	9	4	4	10	6				2	
2003		5	2	9	6		1	6				
2004	4	25	22	16	18	9	2					
2005		12	15	10	23	6	4	14	2			
2006	18	5	16	21	25	5	11		1			1
2007	18	11	22	45	31	16	39	6	2			
2008	13	23	20	35	39	43	23					
2009	29	31	22	25	35	34	39	2	1			
2010	34	36	25	23	27	43	35	1				
2011	1	19	15	16	15	41	30	3				
2012	19	21	26	21	29	26	20					
2013	18	35		24	31	38	71	3				
2014	49	54	36	41	52	69	32					
2015	23	32	26	49	58	69	76					
2016	42	33	43	35	52	66	125					

ソウシチョウの体色だが、オスは喉が橙色で目の周りが淡黄色である。腹部も淡黄色で、背と脇は灰色である。頭部は黄緑色で、初列風切の基部外縁が赤色で先が黄色である。メスの喉は黄色で、腹部は淡灰色である。目の周りは白っぽい灰色で、頭部は暗黄緑色である。一見オスよりも地味を感じる。雌雄とも嘴は鮮やかな紅色である(写真1)。



写真1 オス(左)とメス(右)
2006年4月14日撮影

2003年には古巣を、2004年・2005年と営巣を発見した。巣はお椀型で、スズタケの地上約1.9mの先端部である(写真2)。巣の外部は笹の枯葉をスギカヒノキの樹皮の内皮を糸状に裂いて、幾重にも絡める。稈(かん)も巻きつけるので、ぶら下がるような格好になる。産座はおもにシダ類の根で、密に敷き詰める。僅かだがコケ類とクモの卵のうも認めた。



写真2 スズタケに営巣したソウシチョウ
2015年8月7日撮影

ウグイスもスズタケに作るが、幾つかの相違点がある。巣は地上1m以下が多く、ボール形で入り口が側面にある。巣は数本の稈を利用し、ぶら下がるような格好にはならない(写真3)。巣の外部は笹の枯葉だが、糸状の根等はほとんど使用せず、もろい感じを受ける。産座も細い茎葉等だが、密な作りではない。



写真3 スズタケに営巣したウグイス
2015年7月13日撮影

2014年ごろから、スズタケに花が咲き、枯れ始めた。状況は年毎にひどくなり、2016年になると、すっかり林床が明るくなった。環境は一変したが、2017年3月12日に、モミの幼木の枝に古巣を発見した。地上約1.6mで、外部の巣材は笹ではなく、落葉樹の枯葉であった(写真4)。スズタケ以外で初めての発見である。



写真4 モミの幼木に作られた古巣
2015年8月7日撮影

2017年7月15日の調査時、ミヤコザサの茂みから1羽のソウシチョウが目前を横切った。飛び出した付近を両手でかき分けると、スズタケの地上約50cmの稈に巣を発見した。巣内には赤褐色の斑点のある卵が4卵あり、抱卵中のメスが警戒して飛び出したのだ(写真5)。このように低い位置の営巣は初見で、環境の変化に対しても順応性が高いと推測される。今後は、温帯林のスズタケだけではなく、低山・里山・丘陵地等の熊笹や木本類でも繁殖する可能性が高いと思われる。



写真5 スズタケの低位置で営巣したソウシチョウ
2017年7月15日撮影

(緒方 清人)

参考・引用文献

- 池田清彦(監), 2009. 外来生物事典. 463pp. 東京書籍, 東京.
- 緒方清人, 1995. (6) 段戸裏谷の野鳥, 愛知の野鳥. 233-243. 愛知県農地林務部.
- 緒方清人, 2005. 愛知県におけるソウシチョウの初繁殖, 西三河野鳥の会研究年報. 8:1-7.
- 柿澤亮三・小海途銀次郎, 1999. 巣と卵図鑑. 238pp. 世界文化社, 東京.
- 設楽町, 1996. 第4章 植物, 設楽町誌 自然編. 249-368.
- 前田茂雄, 1999. ソウシチョウの愛知県初標識記録について, 西三河野鳥の会研究年報. 2:19-20.



各調査地の状況

ウグイスの繁殖期は概ね4月から8月頃と思われ、5月下旬に巣立ちビナが確認されることもあるが、平野部の場合は5月に囀りが聞かれても以降確認がされない例が多い。ウグイスは巣立ち後も囀りが続き複数回繁殖するものと思われることから、6・7月を繁殖安定期としてその最大数をグラフに表した。

6・7月にウグイスの生息が確認されたのは県内22調査地点の中の19地点であり、これらを大きく4つの型に分けて解説する。(6・7月の数値が対象なので、1967年など調査の開始が10月の場合は当年の記録はない)

1. ウグイス本来の繁殖地である調査地

ウグイス本来の繁殖地であり、1960年代以前から現在までほぼ同一の範囲で繁殖していると思われる調査地として、「茶臼山」「段戸裏谷」「鍛冶屋敷」「県民の森」の4地点があげられる。「茶臼山」は牧場の周辺に二次林がありその下草にササの群落が広がる環境で、牧畜業は衰退したが環境は大きく変化せず、現在はスキー場を中心とした観光業が発展している。

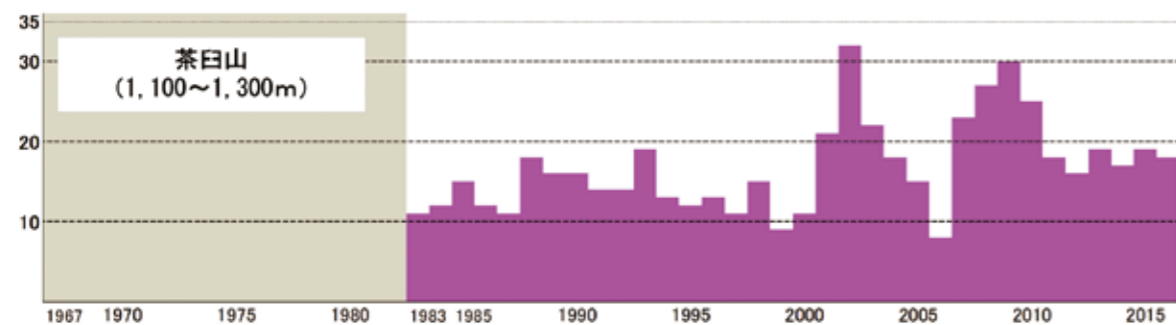
「段戸裏谷」は原生林で下草にササ類の群落があり、1980年代以降は10年程度の周期で生息数が増減しており、ウグイスの繁殖には安定した環境が保たれているが(1984年は6・7月の調査記録がなく5月20日の記録を充当)、2017年現在、調査地を含む周辺の山地ではスズタケが更新と思われる現象により広域に全て枯れている。今後ウグイスをはじめササ類に営巣する種の動向が注目される。

「鍛冶屋敷」は上部が集落と林、下部は矢作川の谷間である。ウグイスの数はゆっくり増加して2005年をピークに減少しているが、上部の林で送電線の敷設等による伐採など、植生に大きな変化があったことも考えられる。

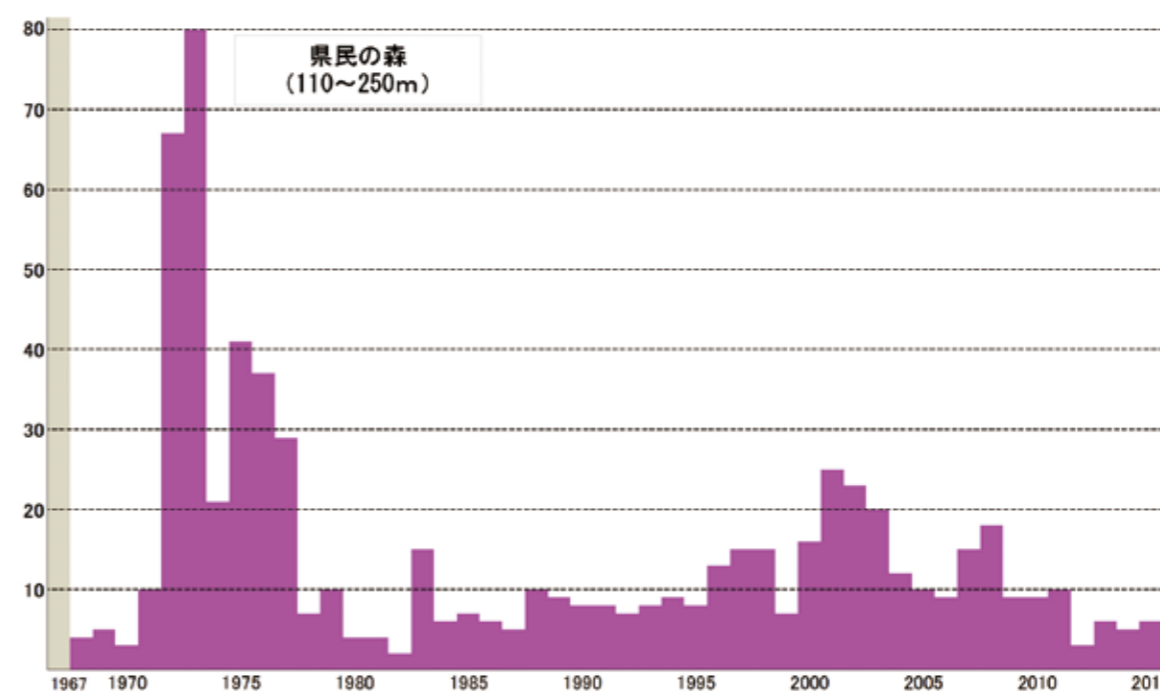
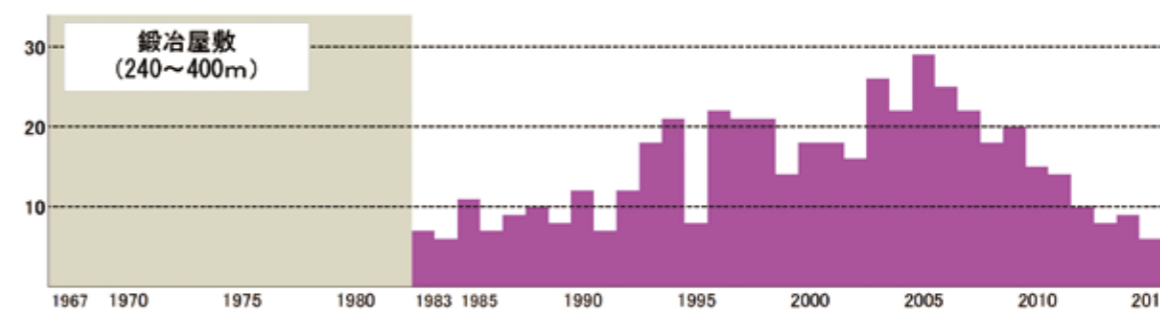
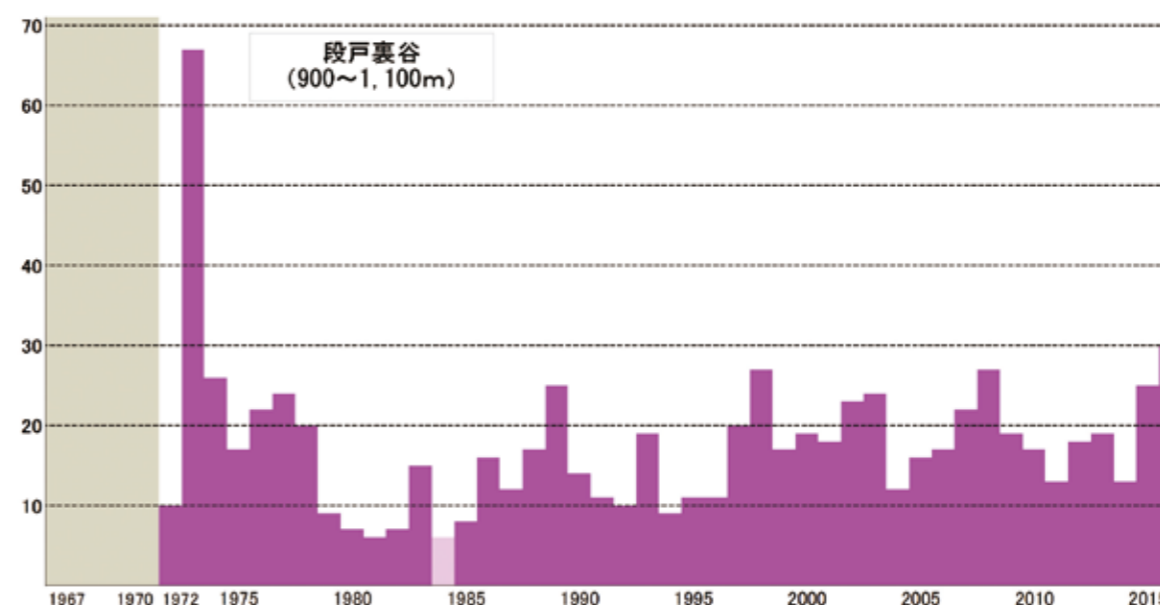
「県民の森」は標高が110~250mで愛知県におけるウグイス本来の繁殖標高より若干低いと思われるが、環境の良い東三河の山塊に位置することで以前よりウグイスの繁殖地であったものと思われる。

なお、「県民の森」では1972・1973年、「段戸裏谷」では1973年に他の年の最大数を大きく超える生息数が記録されており、他にもグラフはないが1972~1983年の間調査されていた「猿投山」でも1973年をピークに1976年以降の3倍程度の生息数が確認されていることから、県内の山地ではこの頃の繁殖期にウグイスが異常に多く生息したようである。

ウグイスの繁殖期における県内分布 (6・7月の最大数)



ウグイスの繁殖期における県内分布 (6・7月の最大数)





2. 繁殖期の確認範囲が拡大し生息数を増加している調査地

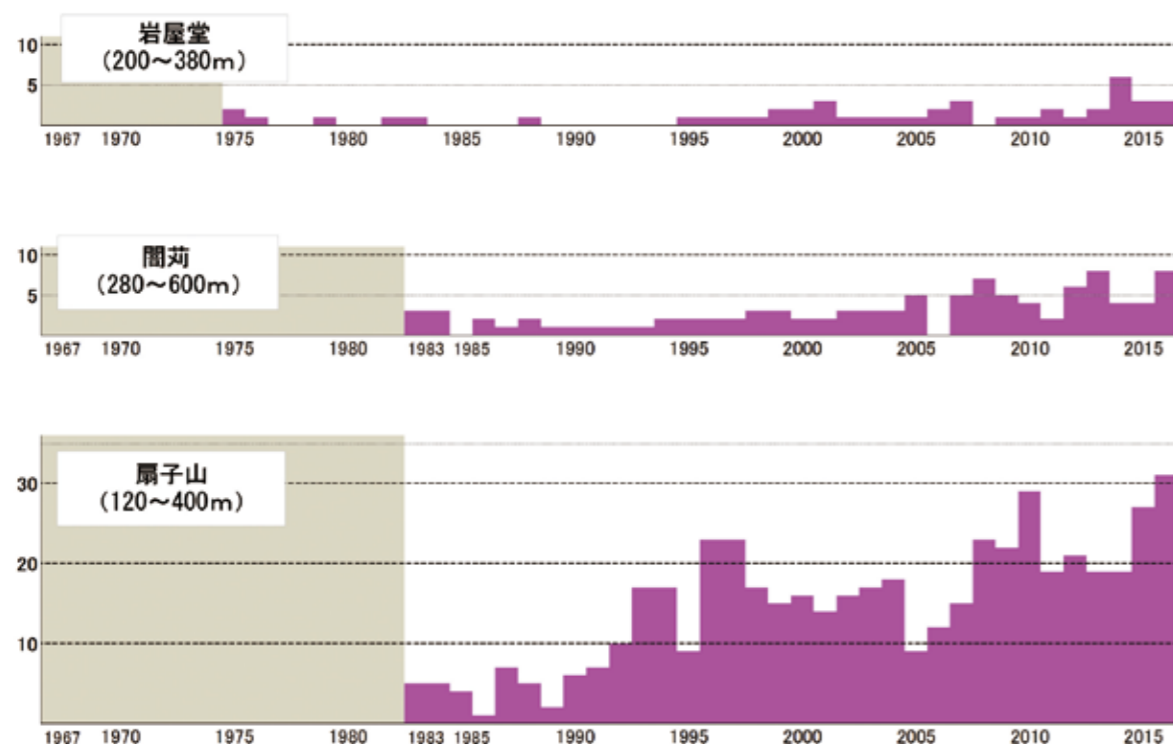
以前から調査地の一部で少数は繁殖していたが、ウグイスの繁殖標高が低地へ拡大した時期に合わせて繁殖期の確認範囲が拡大し生息数も増加している調査地として、「岩屋堂」「闇苅」「扇子山」の3地点があげられる。上記3調査地の共通点は標高差のあるルートでの調査であり、調査開始当初より繁殖していたと思われる頂上部分には集落等がないことである。

「岩屋堂」は調査開始当時に山の樹木は幼齢でウグイスの繁殖環境があったが、樹木の生長で一時繁殖環境がなくなり、その後繁殖標高が低くなったことにより増加したことが考えられる。

「闇苅」も同様と考えられるが、繁殖環境が継続していたものと思われる。

「扇子山」の山塊は三河山地の山塊とは連続していないが、標高400m程度の尾根沿いには以前よりウグイスが繁殖していた。調査ルートが比較的浅いので確認される個体数も多く、「2.」の環境を代表するような生息数増加の特徴がグラフに表れている。

ウグイスの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）



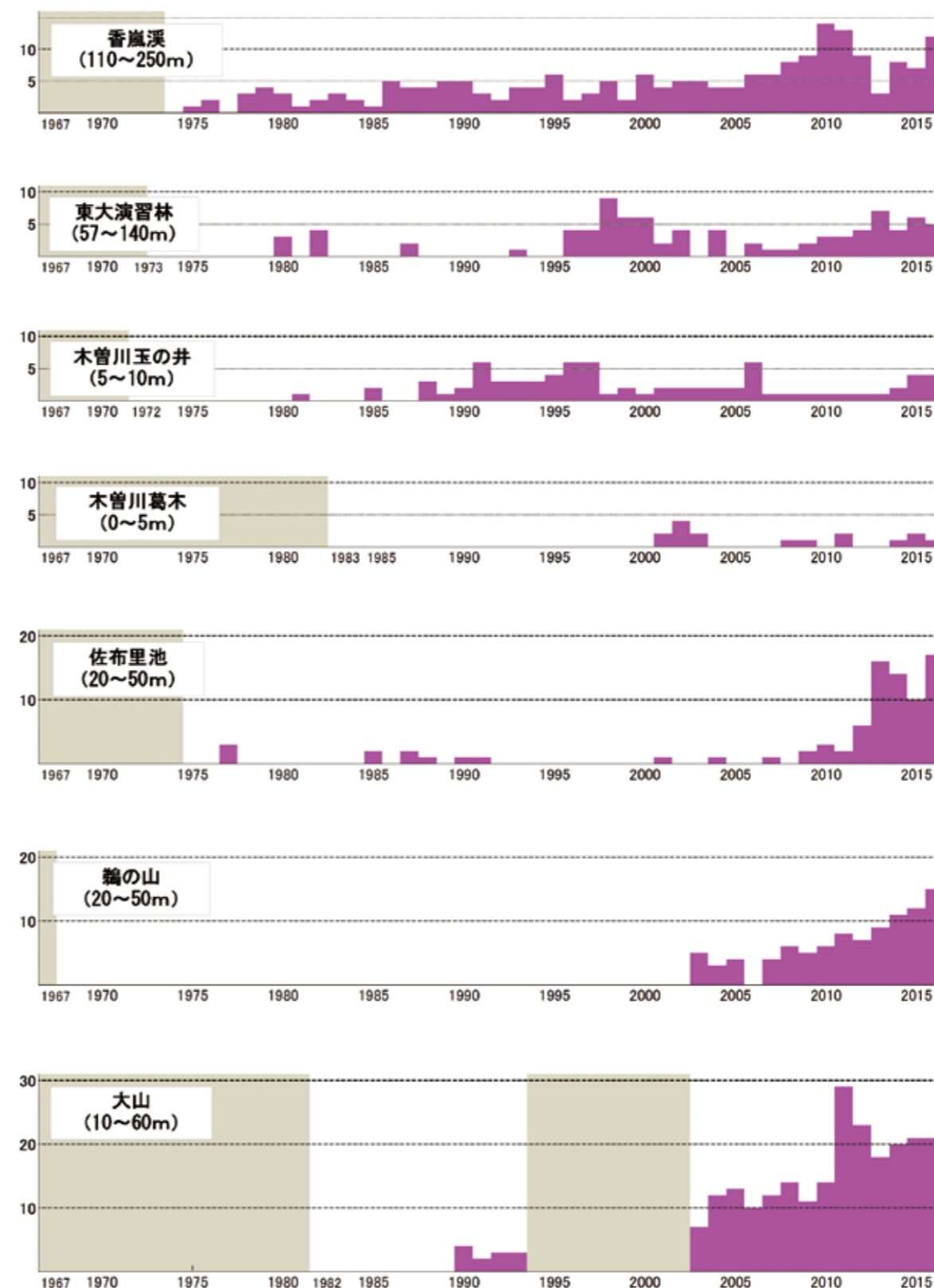
3. 途中から繁殖期の生息が確認された調査地

愛知県鳥類生息調査の開始時は繁殖期の確認が無く、途中から繁殖期の生息が確認されるようになった地点として、「香嵐溪」「東大演習林」「木曾川玉ノ井」「木曾川葛木」「佐布里池」「鶴の池」「大山」「古山」「汐川河口」の9地点があげられる。

「香嵐溪」は標高が低いものの、「闇苅」と同様「2.」に該当する地点であるのかも知れないが、グラフでは新しく繁殖が始まり、ゆっくり増加している状況がグラフの形に現れている。

「東大演習林」は標高の低い尾張東部丘陵の端にあり、生息数の変遷には地理的な要因の他

ウグイスの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）





に開発の影響も推測される。早い時期から分布しているが、繁殖期の定着が安定するまでの間に時間を要していることが分かる。

「木曾川玉ノ井」は平野の河川敷であるが、調査範囲内には林や耕地など多様な環境が混在している。比較的早い時期から分布があり定着しているが、面積が狭いことで生息数は管轄官庁の河川管理やホトトギスの托卵などに左右されていることが推測される。

「木曾川葛木」は容易に変化する環境と思われ、今のところ安定した繁殖地とは言えないが、「木曾川玉ノ井」の下流に位置しておりウグイスの繁殖分布が木曾川沿いに上流から下流へと拡大していることが分かる。木曾川に限らず三河地方の河川でも同様の傾向が見られ、西三河の平野部で最初に確認されたのも矢作川の河川敷である。分布は下流へと拡大しており、2017年には「矢作川河口」調査地の直ぐ上流まで分布が広がっているため、近い将来「矢作川河口」でも確認されるものと思われる。

「佐布里池」と「鶴の山」は知多半島にあり、繁殖分布は北の「佐布里池」から南の「鶴の山」へと広がっている。

渥美半島では「大山」「古山」「汐川河口」の順で確認されているが、基本的にウグイスの分布は東から西の方向へ拡大しているようである。

4. 上記以外の調査地

上記のいずれにも当てはまらないと思われる調査地として、「栗代」及び「平和公園」「平針」の3地点があげられる。

「栗代」は奥三河に位置し標高も高いが、周囲を標高 600m 程の山に囲まれて標高差 300m 近い谷間が中心の調査地である。ウグイス本来の営巣には適した環境でなく、調査開始の 1983 年はすでにウグイスの繁殖分布が低地へ拡大し始めている。2000 年前後の生息数増加は、林部の伐採や農地周辺の荒廃などで一時的に繁殖環境が創生されたことが考えられる。2005 年以降繁殖期の確認はないが、ホトトギスは継続して確認されていることから、山頂付近など調査地の近隣ではウグイスが繁殖しているものと思われる。

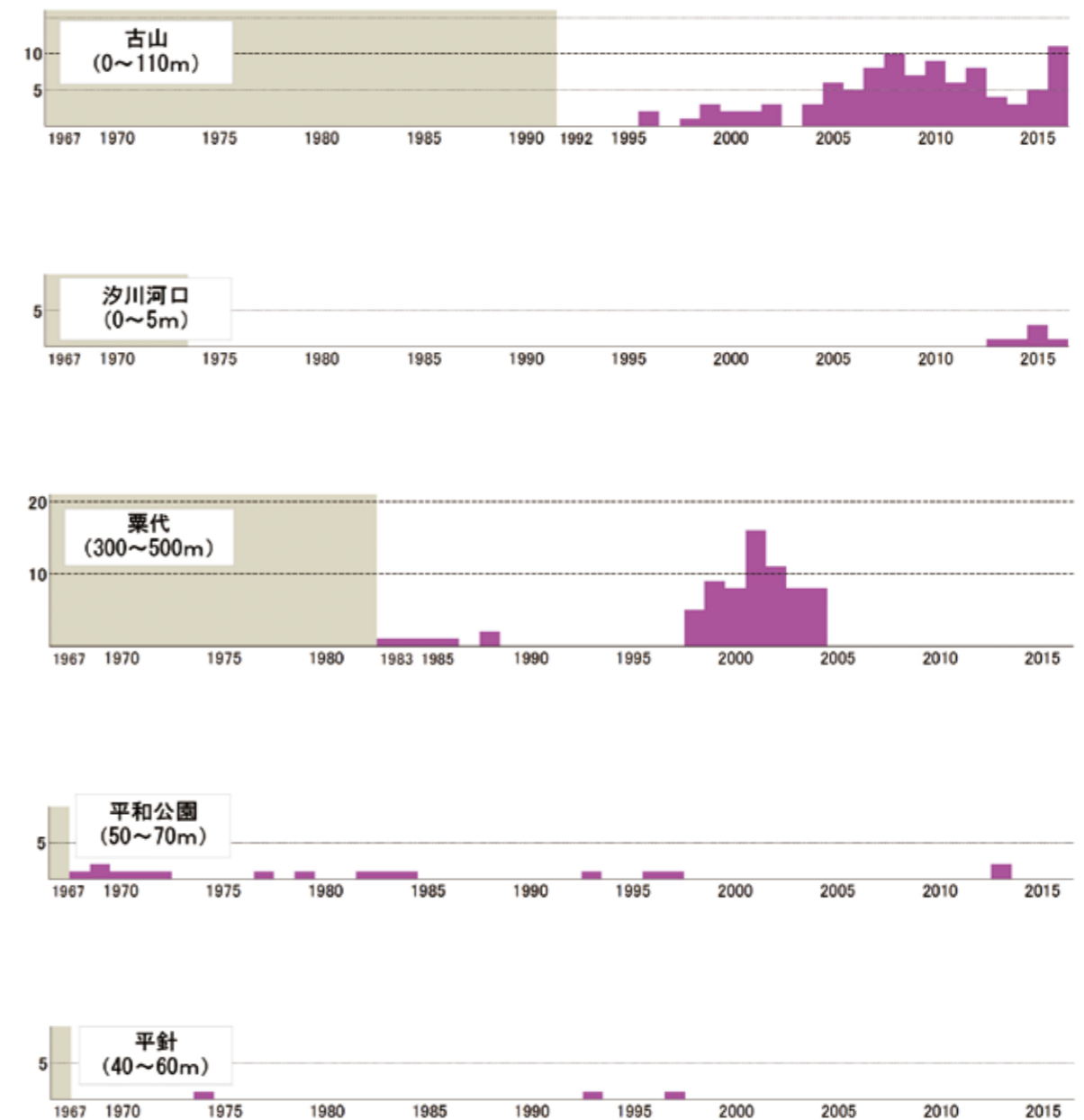
「平和公園」と「平針」は現在市街地の中に位置する緑地の環境であるが、調査開始当時は市街地でなく、郊外に開発された丘の環境であったと思われる。「平和公園」は広大な墓地公園であり、今後もウグイスが繁殖する可能性は残されるが、「平針」は極度に市街化が進んでおり、その可能性は低いと思われる。

ウグイスの一般的な生態

1970 年代までの常識では、東海地方のウグイスは春から夏の間を標高の高い山地の繁殖地で過ごし、秋が深まると里へ下りて冬を過ごす「漂鳥」とされていた。「漂鳥」とは周年国内に生息する野鳥の中でも季節によって生息場所を移動する種であり、季節による移動をしない「留鳥」と区別されていた。

「漂鳥」の季節による移動には、春夏をより北にある繁殖地で過ごし秋冬を温暖な南の地で過ごすために往復する「水平移動型」と、春夏を標高の高い山頂付近で過ごし秋冬を標高の低

ウグイスの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）



い山麓や平地で過ごす「垂直移動型」の2種類に分けられていて、ウグイスは「垂直移動型」の代表種とされていた。「垂直移動型」には他にヤマガラ等のカラ類・メジロ・アカゲラなどがあげられ、これらの種は実際に冬期になると山頂付近にある繁殖地では生息数が減少する。

しかし、最近の遺伝子による解析では冬期沖縄で観察されるウグイスが大陸の亜種やカラフトの亜種であるという報告があり、「垂直移動型」のメジロやカラ類が伊勢湾を越える渡りを観察する機会も多い。愛知県で繁殖するウグイスがどこで越冬しているのか？越冬するウグイス



がどこで繁殖しているのか？などほとんど解明されておらず、今後の研究が待たれるところである。

筆者の育った岐阜県中央の山間部でも、1960年代まではウグイスが山麓で観察できるのは秋から春先までの間に限られていた。鳴き声は笛鳴きばかりであり、春に囀りを聞くと山麓からいなくなる野鳥であった。繁殖期は標高400m程度以上の尾根付近にある疎林などに生息していたが、現在では繁殖期に山麓でも生息しており、岐阜県においても愛知県とほぼ同じ時期から繁殖期の分布が標高の低い山麓へ拡大してきたものと思われる。



ウグイスの繁殖環境

過去には、ウグイスの繁殖地は本州の山地に多いとされていた。営巣する植物はササ類が主であるが、ササ類以外の灌木で営巣することもあるとされている。県内でウグイスが好んで営巣するササ類は、本来標高の高い場所に分布しているスズタケやそれより低い場所に分布するネザサの仲間などを含め、稈が細く草丈の低いササ類であることが常識と思われていた。「木曾川玉ノ井」「木曾川葛木」「鶴の山」のササ類は、山地のササ類に比べれば大型であるが、三河平野部や渥美半島のササ類と比較すれば小型である。矢作川水系では、2000年代よりメダケと思われる大型ササ類の群落で繁殖期に確認されるようになっており、渥美半島の太平洋岸ではさらに草丈が高く密生したササ類の群落で1990年代の半ば頃より繁殖期にウグイスが生息するようになった。

ササ類は同じ種でも分布する環境や栄養状態、草刈の有無などにより稈の太さや草丈に大きな差異が生じるため、筆者のごとき門外漢に種の識別は困難である。県内におけるササ類の種全般の傾向として、標高の高い場所では稈が5～8mm・草丈が1～2m程度であり、標高が下がるにつれて大きくなる傾向があり、西三河平野部の水辺ではさらに大型で、渥美半島の太平洋岸が最大で稈の太いものは30mm以上・草丈の最大は6m以上となっている。しかし、渥美半島の大型ササ類でも群落の縁に位置するものの中には、同一の種でありながらスズタケのように細く草丈の低いものも存在する。

渥美半島の「大山」では1990年から分布して生息数も増加しているが、調査範囲周辺でササ類の植生がある場所は山麓のごく一部に限られている。渥美半島の「古山」では1996年から確認されており、海側にあるササ類の群落で多く確認されているが、山側でササ類の植生がかなり少ない環境でも繁殖期に確認されている。ササ類の植生が極めて少ない渥美半島の照葉樹林ではどのような植生に営巣しているのか、今後の観察が待たれる。

「汐川河口」では2013年から繁殖期に確認されているが、近年、干拓地の中にある畑の放棄地などに大型ササ類の群落がみられる。

平野部において1960年代から1970年代の初期に繁殖期の記録のある「平和公園」「平針」「佐布里池」などの記録をみると、ウグイスは本来標高に関係なく繁殖を試みる種であることが推測されるが、県内の平野部で繁殖期の定着が確認されたのは「木曾川玉ノ井」の1988年が最初である。

以上の調査結果より、県内では①本来の繁殖環境である小型ササ類の環境、②三河地方の平野部や渥美半島の太平洋沿岸などにある大型ササ類の環境、③「大山」や「古山」の山側など、ササ類の極めて少ない環境と、繁殖期は3タイプの環境に分布していることが確認された。

繁殖分布拡大の要因

県内におけるウグイスの繁殖分布が、1970年代まである程度標高の高い山地に限られていたことについて、その理由が人間社会の土地利用にあったことが考えられる。

現在では想像することも困難であるが、有史以来1960年代の半ばまで食糧難の時代が続いていたのが日本の歴史である。食料や生活に必要な物資を確保するために、人が生活する周辺の土地は無駄なく利用されてきた。農村部にLPガスや石油が普及するまでの燃料は全て植物から得られていたので、農地にも林にも多くの人が入り、ササ類はウグイスが繁殖ができる程繁茂できなかったのである。メダケのような大型のササ類は、建築や農業・漁業などの資材として利用され、現在のように群落が放置されることもなかった。

経済が高度成長を始めた頃から農林業に携わる人手が減少し、農地や林の隅からササ類の繁茂が始まったことで、山地にも平地にもウグイスの繁殖環境が多くなってきた。

また、1950年までウグイスは無制限に飼養が可能であり、その後、何度か規制は加えられたものの実際にとり締りが厳しくなったのは1980年からである。人間による捕獲圧も、ウグイスが分布を拡大するには大きな阻害要因であったことは間違いない。

ウグイスは低地に分布を拡大することで、ホトトギスの托卵が少なくなる利点がある。しかしほとんどの調査地では、低地へ分布拡大後にホトトギスの分布がみられている。現在繁殖期に生息している調査地の中で、未だ繁殖期にホトトギスの分布がないのは「木曾川葛木」と「古山」だけである。ちなみに三河湾の佐久島や梶島でも繁殖期にウグイスの分布が確認されているが、今のところホトトギスの分布は確認されていない。

(高橋伸夫)

引用文献

- 山階芳麿, 1941. 日本の鳥類と其生態第二巻. 116・117pp. 年岩波書店, 東京.
 愛知県, 2017. 愛知県鳥類調査結果. 愛知県..
 真木広造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. 日本の野鳥650. 537・538pp. 平凡社. 東京.



各調査地の状況

キビタキは、愛知県に3月下旬から5月上旬頃渡来して繁殖し、9月下旬から11月上旬頃に渡去する夏鳥である。繁殖分布は、平野部や標高の低い場所で5月の中旬頃まで囀りが確認されても、以降の確認がされない例が多い。愛知県における繁殖の安定期を6・7月として、調査で確認された15地点の最大数をグラフに表した。（「段戸裏谷」のグラフで1984年は6・7月の調査がされなかったため、5月20日の記録を充当）

グラフより「粟代」を除く14地点では全て増加傾向がみられ、県内における繁殖期のキビタキは1980年代以降確実に増加していることが分かる。「粟代」は比較的標高の高い山間部にありながら、1984年に1羽が記録されたのみである。調査地が標高差のある谷の下部に位置していることや、ルート周辺に耕地や若齢の人工林が多い場所であることで、キビタキの繁殖には適していない環境であることが推測される。他に標高が高いにもかかわらず調査開始当初に繁殖期の生息が確認されなかった「闇苧」でも、調査範囲の大半が標高差のある谷間であることが最大の要因と思われるが、広葉樹の植生も多いことから、調査開始当初に調査範囲の広葉樹が幼齢であったことも推測される。

調査地全域が標高140m以下の調査地点をみると、丘陵地の「平和公園」で1981年に確認された1羽を除けば、他の全てで1990年以降に繁殖期の分布が始まったことになる。1980年代以前の愛知県では、ある程度以上の標高でなければキビタキの繁殖は困難であったことが推測される。

調査地の中で6・7月にキビタキが記録されていないのは、調査範囲の中心が河川敷と水面である「木曾川玉ノ井」「木曾川葛木」「庄内川河口」「矢作川河口」、主な調査範囲が干拓地である「鍋田」「汐川河口」、および知多半島の丘陵部に位置する「鶉の山」の7地点である。標高は「鶉の山」が20～50m、「木曾川玉ノ井」が5～10m、残り5地点は全て0～5mである。

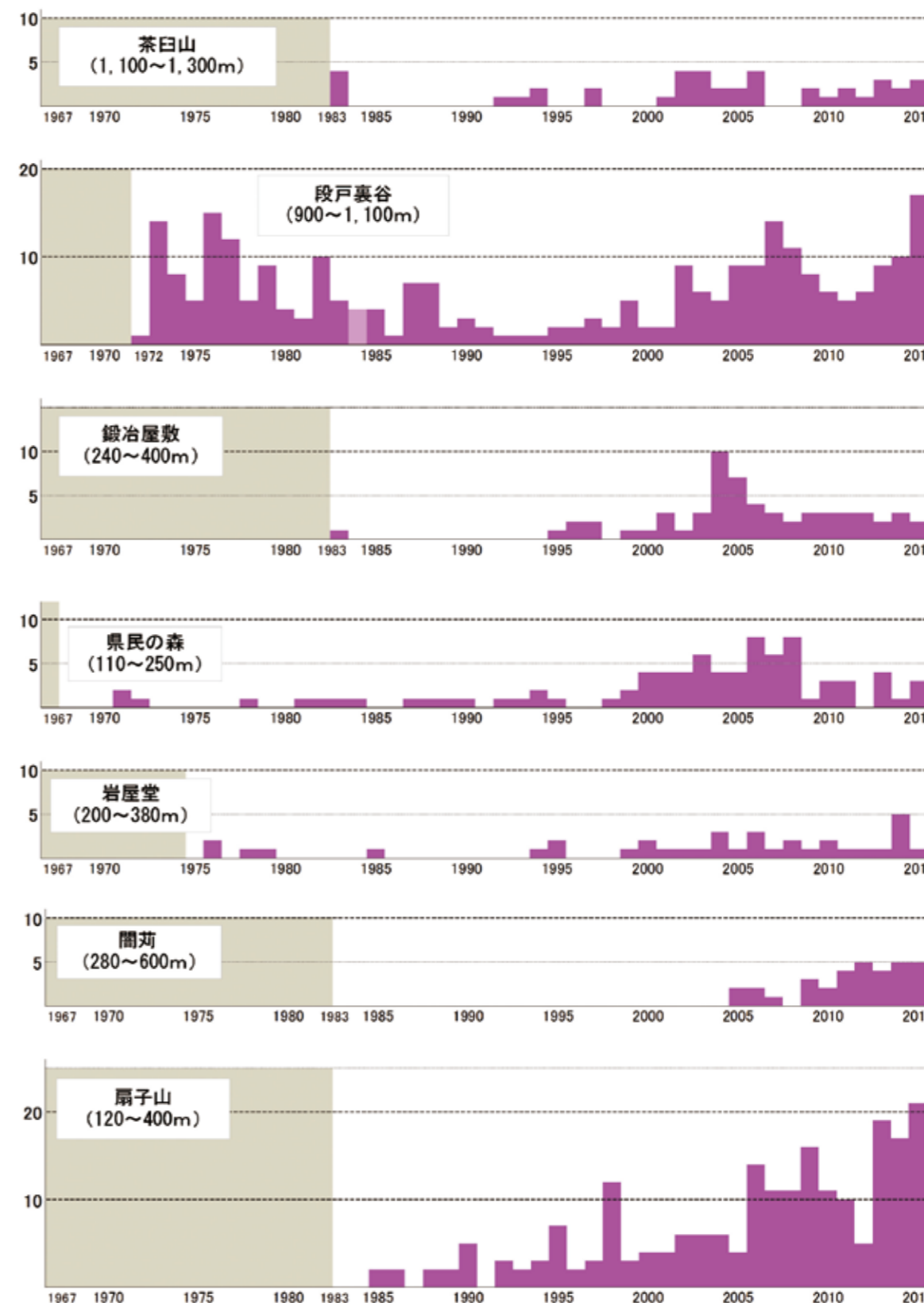
キビタキの繁殖環境

キビタキは、よく繁った広葉樹林や針広混交林等にある樹木の洞や幹の裂け目、樹枝上や蔓が絡んだ場所の葉影などに営巣することが多くとされており、シジュウカラ用の巣箱を使用した例も報告されている。繁殖期は尾根筋など周囲の開けた地形を好む傾向があり、立木に営巣する種として営巣場所が見下ろしや視線の高さになりやすく、外敵の目に着きにくい地形で繁殖していることが推測される。キビタキは樹冠の内側の枝に紛れて囀ることが多いために姿を確認することは難しいが、囀りは音量があって遠くまでよく届く。

繁殖期の生息環境がキビタキとは対照的な種として、オオルリがあげられる。県内ではキビタキと同様の標高へ飛来して繁殖する近縁種の夏鳥であるが、オオルリの場合は主に崖のある環境を好んで生息する傾向があり、キビタキと同じ山であっても沢や谷の環境に多く生息する。営巣場所は谷間であるが、縄張りの誇示は高い木立の先端など、よく目立つ場所に止まって囀りを行う。ちなみに両種共に美しく複雑な声で囀るが、キビタキの囀りは早いテンポで同じ節回しを繰り返すこと、オオルリでは比較的ゆっくりとしたテンポで一声ごとに節回しに変化し、囀りの終わりにジジッと濁った声を入れることが囀りによる両種の識別点である。

キビタキの営巣に必要な洞や裂け目ができるのはある程度の齢を経た樹木であり、蔓が絡む

キビタキの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）





環境には植物種の多様性やそれに合った土壌の生成など多くの条件が必要となる。河川敷や干拓地の土質は、堆積した砂と客土として持ち込まれた土などが主体である。山地や丘陵地と比較すれば植生は貧相で、樹木も若齢である。河川敷や干拓地の中に林を有する調査地も少なくないが、今のところキビタキが繁殖できる環境には至っていないものと推測される。丘陵地である「鶉の山」は特異な環境であり、生息するカワウの糞により林が更新され、調査範囲の林が比較的若齢であることが要因と推測される。

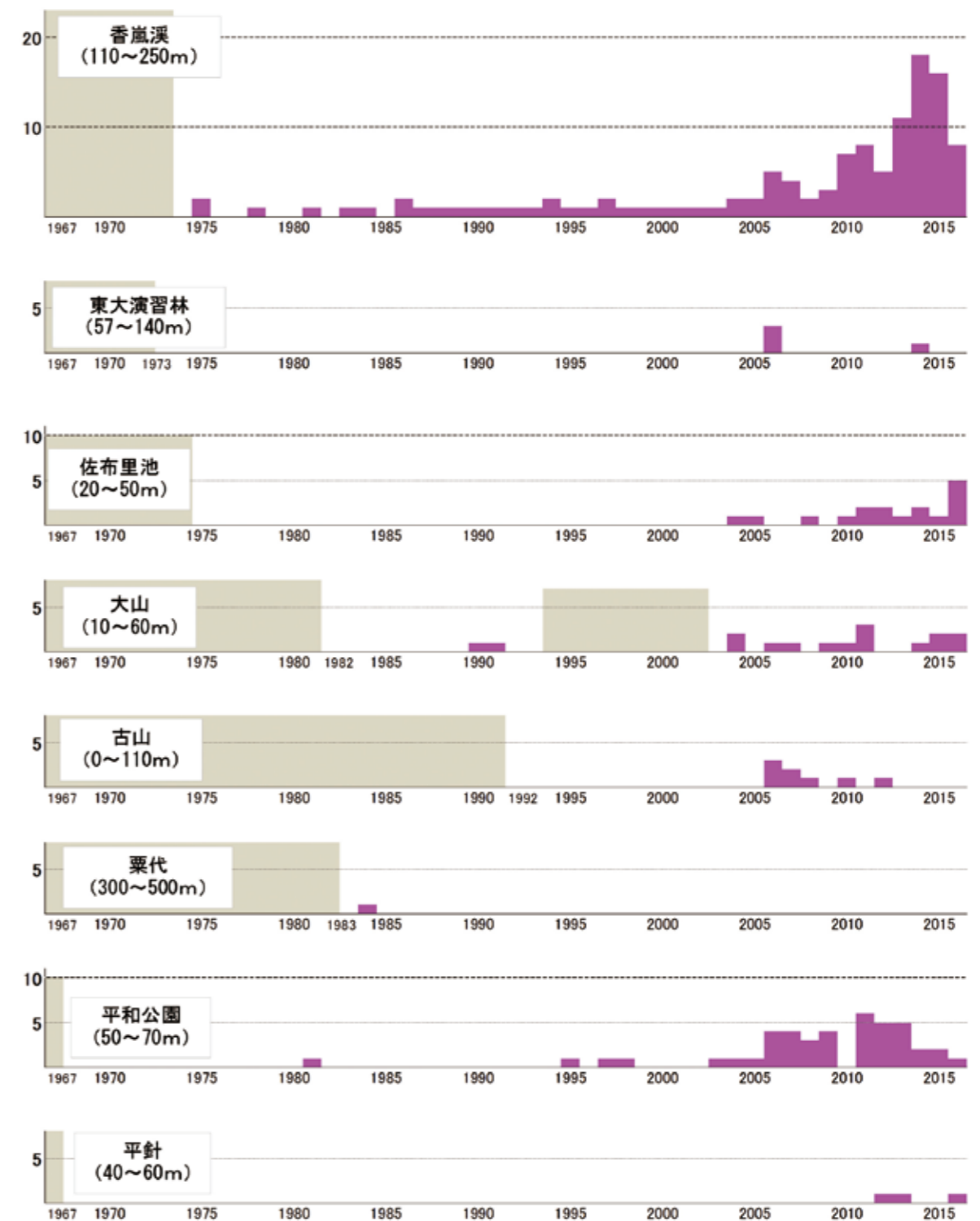
繁殖分布拡大の要因

標高が 140m 以下でキビタキの分布が拡大している調査地「東大演習林」「佐布里池」「大山」「古山」「平和公園」「平針」は、全て標高の低い山地や丘陵地である。これらは全て集落の周辺にあり、1960 年代までは主に薪炭林として利用されてきた雑木林である。1990 年以降徐々に繁殖期の生息が始まりその数を増しているのは、薪炭林に人手が入らなくなり放置されたことでキビタキの繁殖環境が創生されたものと思われる。キビタキの繁殖環境として必要なのは開けた地形にある繁った雑木林であり、その条件に標高は本来含まれていなかった可能性がある。

キビタキの囀りは複雑でウグイスのように明確でなく、繁殖地ではオオルリのように目立った場所で囀ることもない。近年は声による識別の資料が溢れており、野外で容易にその再生をすることも可能であるが、それでも声による種の識別は容易でない。囀りは高音であることから、距離や地形によってはその確認状況にも個人差は大きい。音声資料が殆どなかった時代の調査では、キビタキのように姿の確認が困難な種の生息数が正確に調査結果に表れていないことも考えられる。



キビタキの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）



(高橋伸夫)

引用文献

山階芳麿, 1941. 日本の鳥類と其生態第二巻. 49・50pp. 岩波書店, 東京.
愛知県, 2017. 愛知県鳥類調査結果. 愛知県.

「野鳥は何を語るのか」

日本野鳥の会愛知県支部 支部長 新實 豊

1967 (S42) 年より始まった愛知県野鳥生息調査が 50 年を迎えるという一年前、この記録を何らかの形で残していくこととなるべく分かりやすい形で表したいという思いから愛知県自然環境課にお願いし、この度報告書としてまとめることができた。

この 50 年間に調査結果をまとめたものとして

1972 年 (S47) 3 月「愛知県の野鳥」 S42 年度から S46 年度まで、
1977 年 (S52) 2 月「愛知県の野鳥」 S42 年度から S50 年度まで、
1989 年 (H 元) 3 月「愛知県野生鳥類生息調査報告書」 S51 年度から S62 年度まで、
2004 年 (H16) 11 月「愛知県野生鳥類生息調査データ集」 S63 年度から H14 年度まで
2006 年 (H19) 3 月「愛知の野鳥 2006」 S46 年度から H17 年度までをグラフで表示
の報告書がある。

それぞれには確認された全種が解説と図表で表わされている。1972 年当時ではパソコンもない時代であり、回を重ねるごとにパソコンが使える時代になったとはいえ、調査地が増え、必然的に確認される種も増えて、その編集を担った先人の皆さんが相当に苦労されたのではないかと思う。

今回の編集に先立ち、各年毎のデータを一元化したところ 30 万行に及ぶ膨大なデータとなったが、昨今はパソコンの性能も格段に上がり、市販の表計算ソフトでも扱えるようになった。また、インターネットを通じて必要なデータを必要な時に提供できる環境が整いつつあるため、編集の方針として、確認した種の全てを図表化しないで調査地毎に特徴ある種に的を当て、50 年間の増減をカラーの濃淡で表示することにした。この図表は公益財団法人日本野鳥の会発行「野鳥」2017 年 1 月号の特集「明治神宮の森と野鳥」を参考にさせていただいた。

私はスズメの解説を担当し、調査地毎の図表から増減の動向にそれぞれ違いがあることがわかった。これは何を意味するのだろうか。調査地の環境の変化がスズメの生息に影響を与えているとすると、50 年をかけてスズメが何かを語っているのではないかと思う。本調査ではこれまでに 347 種が確認されているが、全調査地を通して増減の動向が明らかになったのはスズメ、ハシブトガラス、ハシボソカラスの 3 種と高橋氏によるウグイス、キビタキの繁殖分布、高橋氏、緒方氏によるソウシチョウの分布を含めて 6 種だけである。30 万行のデータの中にはまだ 341 種の野鳥が何かを語っている。この中から 1 種でも多くを明らかにしてもらえたいことを願いたいし、この調査がこれからも続き 100 年、200 年のデータが蓄積され野鳥の語りに耳を傾けてくれる人が出てくることを願う。

～ 謝辞 ～

この報告書は多くの方のご協力により作成することができました。

50 年間のデータを蓄積する事ができた歴代の調査員の皆様、各調査地と野鳥の解説を執筆していただいた現調査員の皆様、ソウシチョウの解析をして下さった緒方清人氏、ソウシチョウ、ウグイス、キビタキの解析をして下さった高橋伸夫氏、この調査が始まった当時を知り、「鳥類生息調査 50 年に当たって」を寄稿して下さった小笠原昭夫氏、また、編集委員として取りまとめに協力して下さった皆様に感謝致します。

そして、最後に DTP 編集を引き受けて下さった田口奈緒子さんには多大な感謝を申し上げます。

付録

愛知県鳥類目録 (2018 年 2 月現在)

24 目 74 科 418 種

この目録は、愛知県内で確認されている鳥類の種類を一覧にしたものです。作成にあたっては、愛知県鳥類生息調査の他、県内の野鳥関連団体等による記録も参照しています。

よって、すべての種が愛知県鳥類生息調査で確認されているとは限りません。

－ 執筆者（敬称略）－

小笠原 昭夫	寺本 育夫
新 實 豊	天野 弘朗
秋山 幸之朗	伊藤 岱二
木野 浩一	片山 卓也
古澤 穎一	太田 次雄
大羽 康利	小嶋 良武
清水 敏弘	萩野 真市
今岡 利保	緒方 清人
花 井 啓	佐藤 武男
岩 井 昇	加藤 正人
米 倉 静	小笠原 正博
高橋 伸夫	渡邊 幸久

－ 野鳥写真提供者（敬称略）－

浅井 利明	竹田 恵一郎
緒方 清人	服部 憲一郎
梶川 将	林 正直
川田 奈穂子	村 上 修
杉山 時雄	村 松 喬
高橋 伸夫	森泉 正人
武 居 栄	矢田 和子

－ 編集委員 －

愛知県自然環境課
 愛知県環境調査センター 企画情報部
 野鳥生息調査 調査員 高橋 伸夫
 日本野鳥の会愛知県支部 支部長 新 實 豊
 日本野鳥の会愛知県支部 調査研究部長 秋山 幸之朗
 DTP編集 田口 奈緒子

Web ページでは、愛知県鳥類生息調査結果を公開しております。

愛知県鳥類生息調査 web ページ
<http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/yasei/chouturi/index.html>

《表紙》

	2
	3
1	4
	5

《裏表紙》

6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17
18	19			20	21
22	23			24	25
26	27	28	29	30	31
32	33	34	35	36	37

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1：コノハズク | 14：カケス | 27：シロチドリ |
| 2：ヒヨドリ | 15：シジュウカラ | 28：スズガモ |
| 3：マミジロ | 16：セグロセキレイ | 29：キセキレイ |
| 4：コアジサシ | 17：キバシリ | 30：ウグイス |
| 5：ハマシギ | 18：ヤマガラ | 31：アオサギ |
| 6：ミツコビカモメ | 19：カワセミ | 32：オシドリ |
| 7：ウミウ | 20：エナガ | 33：シノリガモ |
| 8：サシバ | 21：ホオジロ | 34：カワウ |
| 9：ミサゴ | 22：アオゲラ | 35：キンクロハジロ |
| 10：オオタカ | 23：チュウヒ | 36：ハクセキレイ |
| 11：チョウゲンボウ | 24：メジロ | 37：ヤマセミ |
| 12：コマドリ | 25：オオアカゲラ | |
| 13：ホトトギス | 26：カワガラス | |

愛知県鳥類生息調査（1967-2016）
50年の記録

発行年月 平成 30 年 3 月
 編 集 日本野鳥の会愛知県支部
 愛知県環境部自然環境課
 愛知県環境調査センター
 発 行 愛知県環境部自然環境課



愛知県環境部自然環境課

〒460-8501 名古屋市中区三の丸三丁目 1 番 2 号

電話 (052) 954-6230 (ダイヤルイン) FAX (052) 963-3526